

# 新たな相貌、物語り巧者としての

## フレデリック・ゴダード・タッカーマンの詩

森 田 孟

本稿は、本誌前号に続いて、フレデリック・ゴダード・タッカーマン (Frederick Goddard Tuckerman, 1821-73) の詩業を、更に新たに十八篇、拙訳によって紹介しようとするものである。依拠する定本は前回同様、モンデイン編の『全詩集』 N. Scott Momaday, ed., *The Complete Poems of Frederick Goddard Tuckerman*, New York : Oxford University Press, 1965. 以下、各作品末にその収録ページを (CP. 96-97) の如く表示する。尚、タッカーマンの人及び業績を巡る詳細を含んだ、彼の全ソネット作品とその終章と目される長詩「コオロギ」の本邦初訳を収録した拙稿「希望回復への道程 フレデリック・ゴダード・タッカーマンの世界」(筑波大学文芸・言語学系紀要『文藝言語研究・文藝篇』第四三号、一三四ページ、二〇〇三年三月刊)は、以降、「森田、二四」の如く、言及ページを数字で表示して略記し、タッカーマン研究の先駆業績 Samuel A. Golden, *Frederick Goddard Tuckerman*, New York : Twayne Publishers, Inc., 1966. ㊦ (㉔・二九) の如く略記する。

★

### エリドール Elidore

業績を巡る詳細を含んだ、彼の全ソネット作品とその終章と目される長詩「コオロギ」の本邦初訳を収録した拙稿「希望回復への道程 フレデリック・ゴダード・タッカーマンの世界」(筑波大学文芸・言語学系紀要『文

彼女の美しさが彼の疑り深い心に届いた  
蒼が清々しい空気の中で花開くように、

それを感じ取る力が鈍くなつてずっと眠っていたのに  
失望、疑い、世俗の疲れ、

不当な待遇への恐れ、到る所での冷淡さのせいで、

ところが、どういうわけか、ある衝動に駆られて

彼は注目するようになつたようだ あのを青ざめた存在にで

はなく

美 のにこやかな輝きに、力の諸々に、気品に。

花の開いてゆく夜明けから殆ど開き切つた花に

あるいは鳥に、あるいは埋れてきた書物に、生命 が所有

するもの

あるいは 自然 が与えるものは全て、あの力を得て一層

神聖になつた。

影響力を揮いたいと 尚も一日一日願ひながら、

それでもやはり女性の狡猾な企みとは違つので、

押しつけがましくはせず、触れて和解しようとする

子供のような暖かさと率直な誠実さを示して

彼に教えようとするのだ 無邪気さそのものによつて

外に表われる美しさに充ちた光を見にくれるようにと。

初めのうちは殆ど感じられないが、詩 の価値が高まるに

つれて

その弱々し気な眼は深くなつたし 唇は目覚めて

遂に曇つた額からあらゆる美しさが迸り出て

彼に告げるのだつた 我がものにせよと 地上の驚異を、

この上なく優雅に包み込まれた優雅な心を、

若くて美しい婦人をと、しかもこの世間知とか

偽善、苛苛した悪意とか

詮索好きからは無理なく免れて

温和で満足していながら 貞節に身を固めて

呼吸は天国へ向けて、信仰は穩やかに護つて。

そういうのが賦与されて欺くことのない 美 というもの、

そういうのが彼の恐れを一掃して微笑み、

「おお 世間の病める心よ、信じたまえ！」という 美だ

つたのだ。

信じかねているうちに、彼にはあらゆる疑惑や嫌な前兆が

夜が溶けて薄れてゆくように ぱつと消え失せるのが判つ

た

そうになると 歓喜と 信頼 が彼のぼやけた展望を再び明

るく照らし出した、

その 歓喜 たるや森で迷つた漂泊者の視界が晴れてゆく

身体を屈めながら暗がりを押し分けて

木々の幹や草藪の彼方に光がちかちかのぞくかと

探した拳句、遂にそれが 安全の星として輝くのを見るの

だ、

あるいは嵐の夜の月の出のようで、そうなると月は

雷雲のどこか真黒になつた尾根から成長し始め

驚異の眼差しを浴びながら ゆっくりと自らを完成させて

彼女をすっかり照らし出すのだ、余りにも鮮やかな不意打

ちに

彼の表情は明るく輝くのだつた あの不思議な美が

光を放つて、思い知らせるのだ 優雅で力強い心を誤解し

ていたのだ。(CP. 96 97)

\* サミュエル・ゴールドデンは言う。この詩は、テニス

流の女性名を標題にした作品でタッカーマンが、妻のハン

ナ・ルシンダへの愛を直接語つたものだ。エリドールは、

エレアノア(Eleanor)とドロシー(Dorothy)から合

成した語で、前者はルシンダと同様「光」(light)を意味

し、後者は「神の贈物」の意で、アン、もしくはハンナは

よつて

「恩寵」(Grace)で、これは「神の贈物」に他ならない。

この標題には、詩人の「妻」が隠されているが、この作品

自体、「恩寵」(Grace)と「光」(light)への言及で充ち溢

れている(G・二九三〇)と。全くそのとおりだと思わ

れる。タッカーマンにとって、詩作は殆ど全て、妻への、

亡妻への、愛の表明であり哀悼であり、傷心から自らを救

出する営為であつたと言つてよいであろう。それが、唯、

美しく感銘深く読者に伝わるのは、この詩人の、資質によ

るものに相違ない。全てへの愛が手離しのようになつて手

離しでない、冷めた心酔だからだと思われる。

\*

### 森の空地 The Clearing

ここ、川 がぐるつと回つて

内陸部と呼ばれる田園を流れる所

花の冠たるこの美しい一帯に

かつて森林地なる荒野が広がっていた、

しかし今は 褐色の樺の木、榛の木、

トネリコ<sup>(1)</sup>、樺の木の地帯は

残されていない。秋の灯火が露にするのは

ことごとく不毛で、禿原で、破棄されている姿。

こつこつした泥灰岩の斜面

雑木林と夢みるような谿谷のせいで

落葉松は燃やされ、樺の木は樹皮を剥がれるか

梁とこけら板用に消え失せた。

不格好に広がった灌木と粗朶の節で

獵師が木陰でへら棒を

作った櫛の木々は

根こそぎ消滅してしまった。

その季節になると 花々が流れに接したり

あるいは落葉でそつと塞がれたり

あるいは芳しい驟雨で

水嵩が増す 水路のそばには

袖のぼろぼろになったシャツが

夏の突風にびちゃびちゃ音を立て、

幽かに柔らかな風が吹きそよぐ

ぶらぶら歩き回る放浪者の巡りに。

ここ、月光の黄金の恩寵が

粉々に碎けて降ってくる所は

暗くなると、黒ずんだちかちか光る線が

盛り上る水面で揺れ騒ぐ、

というのも ここ、松がその時わずかに

滴らせたもので褐色になっていた所は

この岩、詩人の休み場 が 支えられて

アイルランド風の山小屋になっているので

おお タベやいつもの昼日中に、

林の、流れ延びてゆく川の

淵ではなく

汝の努めて歩き回る所ならどこであれ

そのように休んでも 汝が遅れることはない、

おお 影 で夢みる人よ

斧や大槌、胴枯れ病が楔によつて

今や岸から 牧場から 切り離されているのだ、

汝は、如何なる悲しみにも挫けず

深刻な不幸に頑なにもならず

もはやサラセニア<sup>(2)</sup>を求めたりはしない、

己れの心もとなひ庭を飾るのに

この汝の神聖な根城で。

失くなってしまったのだ 幸せな四阿は

それでそこを離れて何年にもなる汝は

他の花々を求めて彷徨わねばならないのだ。

春 風はもう訪れないだろう

楽しい噂のように、

エゾゼミの情熱溢るる歌が

夏 の耳を劈くことも。

そして 森が乾燥したり

秋 の兆しと共に紅く染ると

この山懷は くすんだ迫持<sup>(せりもち)</sup>や

緋色の日覆いからの音楽を 懐かしむことだろう、

それでも十一月の雨が

森に降り定まって

樹木から色を洗い流し

花屋から彼の愛しい人々を遠のけると

善が垣間みられるように思われる

優しい埋め合わせとして、

今や言うに足る美が

ここには残されていないのだと思い出しながら、

おまけに、私たちの愛するものにとっては

疑いと恐れのでいで私たちは麻痺してしまうとはいえ

あの優雅な 過去、生み出された利益が

私たちから取り去られるなどとは思ひもよらぬこと、

だから 消え去ったものは保持しておこう

そして もっと緑になる瞬間瞬間を抱き締めよう、

たとえあばら家は隅々まで煙で燻されていて

アイルランド系が議会を支配することになっても、

そうなのだ、帯状の木陰になるように

硬い乾いた縄が林立し

花咲く谷々は 溢れ返り燃えている

ヌスビトハギ<sup>(3)</sup>、カラスノエンドウ<sup>(4)</sup>、及び アザミ<sup>(5)</sup>で、

なのに、その 川 は 荒涼として流れている

私たちは報われないままではない、  
私たちの愛が嘉<sup>よ</sup>される

花咲く天国を 記憶がガラスで覆っているのだから。

だから こういう快活な 絵 が

私の胸奥深く根付いて

上空の青を永遠<sup>とわ</sup>に封印し

永遠に花を翳<sup>く</sup>らせてくれればよいのだが

俗界<sup>スタイル</sup>の剣によつても

悲しみ の火と火薬によつても一掃されたりしないのだ

から

もつと堂々と大枝を出し、もつと誇らかに

大波の頂点を揺すつてくれてよいのだ。

しかし もし大枝と先端<sup>(6)</sup>を

時の鈍い剣が切つたり砕いたりし

木材は高貴な幹のゆえに存在し

崩壊は絡みつく枝々のせいで起り

それであらゆる栄光が霞むものなら

私が、深く愛された 自然 のために、

彼の本性は野蠻だし 彼の小屋は粗末とはいふものの、  
それを 被造物 と取り替えてもよいのだろうか。

(CP. 97 100)

1. ash. 栲、秦皮。モクセイ科トネリコ属の落葉高木の  
総称。"Venus of woods" 「森のヴィーナス」と呼ばれ、古  
くから縁起の良い木とされた。花言葉 "grandeur" 「威容」。
2. pitcher plant. 新大陸の湿原に生えるサラセニア属、  
ダーリングトニア属などの食虫植物の総称。
3. tickseed= tick trefoil. マメ科ヌスビトハギ属の多数の  
植物の総称。
4. tare. ソラマメ科の植物、特に、カラスノエンドウ。
5. thistle. 紫色の頭花、棘のあるキク科植物の総称。
6. bough and butt. この詩人の多用する「二詞一意」  
の一例。bough's butt (大枝の先端) の意。

\* 全十二連ともA B C B C D A Dの型の正確な押韻構成  
作品。次の「川に寄せる」と対になるともみえるもの。タ  
ッカーマンの自然に寄せる思いの深さが、特に「川」を中  
心にして展開・啓示されることを、この作品と次作はよく

示しているだろう。

\*

### 川に寄せる To the River

そろそろ夜、心の癒される夜、

カ<sup>(1)</sup>口がつい先程口にした言葉のように、

青く晴れ渡った日になるかしら？

一日中途切れずに輝かしい日に？

そなたは私にそう訊ねる、歩きながら知ろうとして、

集まってくる豊かな内容にも拘らず

水の流れの向きも何のその、通り過ぎながら

殆ど注意を払わない、

風にも天候のきらめきにも

それらを記録することも全くしない

それでも暗がりの向うに 私には殆ど

その金色の境が見える気がする。

夜の背後に昼が隠れている

私には 規則にも押韻にも

その理由が見い出せないが、全てが語っているのだ  
季節に相応しい一日になるだろうと。

それでカ口ももっと柔和に微笑むだろうし

カ口が顰め面をすることは更に稀になるだろう

しかし暫くは そなたの恋人はそのままにしておこう

それだけ彼女が尚美しいと判るだろう

私と一緒に歩きながら、道端ではなく

彼女を少し喘がせながら

私たちはうねうねと森を辿り続けよう

川に突き当たるまで。

そこで私は告げよう どこに 愛は、しづしづではあれ

そなたのよりも十分な収穫を積み上げるかを、

それでも私は知ってきた その成長段階を

それで彼が刈り取る所へと蹴<sup>ツ</sup>いてきた、

なのにこれを 今やそなたは天上へ投げ上げたのだ

訴えかけるように、死に挑むように、

情け容赦のない巨大な情熱

神か巨人の愛のような！

というのも 一方は 心打つ涙に打たれ  
荒れ狂う天候に焼かれ

猛烈な勢いで刈り取られるのだ 穂が

半熟だつたり稔つてなかつたりしても、

他方は 幽かな雨に打たれてうなだれ

すっかり緑色に濡れて成育するのだ

いつまでも安息の領域で

終りも種蒔き時も知らぬまま。

しかし ある者は、見ないでいらなくなるので

昼間を拒絶し、多くの者は

日光が極く幽かにでも差す所では

根をつめて覗き込んで探すのだ ピンをペニー貨を、

そして嘲けるのだ 牧場に広がるものを

森が取り巻くものを

そしてユース<sup>(2)</sup>の息子たちのように 鉄の

頭で 手で 足で

巨人族<sup>タイタン</sup> の大鎌をぐいと攫んで傷つきながら

丘をばらばらに薙ぎ払つたものだ。

そして林、林を一払いで切り倒し

ミューズたち<sup>(3)</sup>を足下に踏みつけたのだ

それでも尚、どよめきの中でこの上ない歓びを覚えて

私は自らが借り主だと悟り

愛するのだ これまでに勝るとも劣らず人々を、

今までよりも一層 自然 を。

あつて欲しいものだ 悲しみを包み込む経帷子をもつてし

ても

空虚な浮かれ騒ぎから乳離れしたり離脱したりしない

頭脳を備えて、雲は担いながら

影の陰からは後込みする人が、  
シャドーシエント

彼なら輝きの中を いつまでも軽やかに動き回るだろう

火傷を負つても火膨れが出来ても  
やけど

そしてもう一人 あの九人に付け足したいものだ

その姉妹たちよりも愚かな一人を。

十人から成る優雅な乙女たちは<sup>(4)</sup>

歌つて踊つて斜めに歩く



しゃべりまくる群衆と人生の眩暈めまいを起こす渦  
を抜けて、全てがけはけはしく空しい中を。  
しかし私は もっと厳かな 詩神ミューズを愛し  
ミンナをブレンダ(5)より愛するの(6)で  
あれらと歩みを共にはしないし、私の見解が  
彼らの信仰箇条に書かれている筈はない。

どうして私たちが自ら 明瞭な意味を

幾らか覗き見るために

流れをずっと自由に溯さかのぼらねばならないのか、

ここでさえ 川 らしく、私たちを轟き過ぎてゆくのに。

しかし 屈んでその大騒ぎは通過させよう

銜てらい屋にして気取り屋、機会を逃がさぬ者たちよ！

そうこうしているうちにも萎れた草の野原では

コオロギがリーニンとすだき 身震いする、

気だるいページをばらばら解き放しながら

そのページを生命いのちで溢れさせたりせず

選えび出し写し取る、薄のろにして賢者、

一部は才人、少しは詩人、

そういう人々と共に彼らはびったりと或る山師に従って  
見張りや番人に注意を払わす  
群がって出かけてゆき ずっしりと住みつく、  
自然 の庭の鴉のように。

彼らは甘きは嘔み、酸きは吸い、

どちらの方が甘いのか分からない、

黄(7)花九輪(8)桜と姫布袋蘭

あからさまな呼吸に燃え立つ韻律、

ミルトン(9)がスケルトン(10)、全ては一つ

何も輝かない所では ぼんやりと薄暗くなるものもない

そして独自の盲目のせいでは

彼等は微風そよかぜと日光をかき消すのだ。

おもしろくして私は その流れの下に飛びこめばいいのか

忘れていられる瞬間だけは、

そして私の夢はことごとく下に置いたまま

その中の泡のように昇ってきて

表面を一撫でして我を忘れてしまふ

その流れが捕えるものは全て得ながら、

しかし真鍮の金物とデルフト陶器の打ち合いの中で

私は粉々になってしまいそう、

おそらく私の手は 運命の杯に迫りそうだと  
（さかすき）

一國を粉々に押しつぶせと、

あるいは 泉が噴き出す所に

凝結の涙を落とせと、

あるいは その涙と共にあの圧力を引き寄せて

（ユイオン）  
和合 の弦をもっと張り詰めさせよと、

流れを棍棒と旗で先端にまで流して

聖なる水と交差させよと。

しかし待とう、私たちの夜をそういつたことで曇らせまい、

何故私たちは 闘ぎ合ったり争ったりすべきなのか、

ほら！ 西の方では 黄金の蜜蜂 が

アメリカシャクナゲの上を宙に舞っている

そして見たまえ、湿った場所にはいずこにも

フキタンポポが群生してきらめいている、

露を帯びて それでもこの上なく聖なる姿で

若い 夜 が自分の子供たちに命名している間に。

どうして私が 吾が微力をもって厳しい非難を

撤回させなくてはならないのか、

あるいは裏切り者をくどくどと支持しなくては、

あるいは安びか物を引き裂かなくては、

あるいは賄賂や利益を探し回らねば ならないのか、

ここでこうして 水溜りや浅瀬に

月の破片が 破片となった量で

縁取られているのを見ている時に。 （CP. 100 04）

1. Carro. 聞き手である「そなた」の恋人。

2. Use. 不詳。だが、開拓による自然破壊を憂える寓

喩が。「使用」、「利用」が固有名詞として。

3. Muses. ギリシャ神話。ゼウスと記憶の女神ムネー

モシユネーとの間に生まれた学問・芸術を司る九人の女神

ムーサイ。カリオペー（叙事詩）、クレイオー「ローマで

はクリーオー」（歴史）、エラトール（抒情詩）、エウテル

ペー（音楽）、メルボメネー（悲劇）、ポリュムニア（宗教

音楽）、テルプシコレー（舞踊）、タリアー（喜劇）、ウー

ラニア（天文学）。この女神たちに歌の挑戦をして負け、女神たちを侮辱した廉でカササギに変えられた、テッサリアー王ピーエロスの九人の娘たち、ピーエリデース（Pierides）の物語が言及されているだろう。オウィディウス『転身物語』Ⅴ・Ⅴ・二九四 参照。

4. 九人のミューズに一人付け足したのだから十人。

5. Minna. 知性（mind）を思わせる女性の名として挙げたものだろう。

6. Brenda. ゲルマン語では“flame”（炎）または“sword”（剣）の意なので、情熱を表わす女性の名として挙げたものだろう。

7. cowslip. キバナノクリンザクラ。「イワナシ」「May-flowers」（本誌前号の拙稿）にも出てくる。

8. calypso flower. ヒメホテイラン。北半球産の地生ランの一種。斑入りの紫、黄、白色の花をつける。“fairy-slipper”「妖精のスリッパ」ともいふ。

9. John Milton (1608-74). Paradise Lost (1667)『失樂園』の作者。

10. John Skelton (c1460-1529). 英国の諷刺詩人。オックスフォード、ケンブリッジ両大学に学んで古典の学殖で

知られる。ヘンリー王子、後のヘンリー八世（エリザベス一世の父）の教育係を勤めた。「スケルトン風」と呼ばれる独自の詩風を創造し、チヨースーとルネッサンス期英国詩の橋渡し役となった詩人。

11. mountain laurel. ハナガサシャクナゲ。北米原産。北米コネティカット州及びペンシルヴェニア州の州花。

“calico bush”ともいふ。

12. coltsfoot. カントウ（款冬）。キク科カントウ属の植物。葉の形が“colt”「小馬」の足に似ている。かつては咳止め薬に用いられた。

\* 山野や小渓谷を散策して自然の観察や思索に耽ったタッカーマンの面目躍如たる作品である。川に托した自己省察の形象化である。各連全てA B A B C D C Dの型で押韻する。尚、本稿末の「補遺」参照されたい。

\*

見知らぬ人 The Stranger

夜明けの 一番早いちかちか光る陰の中

庭芝の日時計の文字盤に

初めて赤みがかったオレンジ色の

微光が触れる前、

暗がり<sup>くらがり</sup>が薄明るくなり

月が、地平線上の土地を

探し求めて跳<sup>は</sup>き 波立つ雲間で、

泳いで疲れ切った人のように消え失せた時、

霧の帳<sup>とばり</sup>を支えとして

自然 に 悲しみを悲しむようにと唆しながら

男が独り 悲し気に立っていた、

松の木々の生い立つ台地に、

盛り上った森と砂と

谷、起伏する山の稜線の彼方の

朝を見張ったり

昼間を見張ったりしながら

嘆き悲しむ薄明りの中に、

午前中の苦悶の中に。

初めて私が マサチューセツ州西部の土地の

不毛の断崖に佇み、離れ易い葉を

落とす松が暮いた山の屋根から

天然の分水界を見舞<sup>みま</sup>かした時、

草木越しにきらめく村では

草の中に川の銀砂が散らばり

丘は全てテュロスの丘<sup>(1)</sup>で、私には思えたのだった、

美しい土地という土地の中でも これ程美しい所はあるま

いと。

そして彼もまた そう信じたのだ 何故といって 一時間

また一時間と

覆い隠されていた谷間が ここかしこ解きほぐされてゆき

私は 山の小径小径に優しく導かれて

窪んだ川また川へ出くわし、木々の纏れた一帯で

新たに自然のさまざまな名前を更に教わりながら

「シェイキング・エイカーズ」から「ネイバーズ・ホール」<sup>(2)</sup>

へ！到る

小さな森から森へと辿っていった時

依然として谷間はいずこも藍色濃く、松の木々、

高みにある農地は各々美しく

そこに私は 彼を、その 見知らぬ人 を、見つけたのだか

ら。仄かに

吹くともなく風が　その vari ゆく一日　その山の台地を  
吹き過ぎていた、彼の動きもそのようにみえたが  
しかし　病める風のようにあちらこちらへ出かけていった  
幽かにふらつく足取りで、それで彼は立つている時、  
今にも倒れそうに立っていた、今や　弱々しい  
青い靄を戴いた　病める秋　といった風情だった。  
人生を独りで歩んできたようにみえる人だった、  
虚弱だったので長年相当に手は尽されたものの  
太陽と陰の他は如何なる救いも求めなかったのだ、  
しかしいつも一人でぽつんと離れていて、顔を深く  
影の中に隠していたが、大抵は彼はボブラの幹のそばに  
居るのを好んだ、さもない時は　彼方のカエデの樹が  
彼の手足に不快な塊を投げかける所で

秋の荷馬車　を待っていた、一日が闊けてゆく時

午前 of 終りとか夜には　そこが彼の占る場所だった。

谷を巡って尖った岩の北の方に連なるのは

若木の雑木林、ごつごつした木々と一番生えで

ひこばえの茂みと実生の木々が混じり合っているなかを  
森の小径が端から端へと曲がりくねって通っている、  
香りのよいイチヤクソウ<sup>(3)</sup>がうなだれ、そこへ漂うのは

ヒメコウジ<sup>(4)</sup>の花のこの上ない芳香、  
苔とクジャクシダ<sup>(5)</sup>と湿った枯れ葉の間に  
密やかな一時間を過すための詩人の回廊がある。

まさにそこで私は　彼が一人言を呟いているのに気付いた  
のだ、

低く流れる小川のようにだったが　彼の言葉を吞み込むため

にそこへ

行くわけにはいかなかった、やはり　近づいた筈の絆が

私たちを引き離したのだ、孤独な　自然　への愛と

隣人だという我慢ならない焦燥感とに。

それで私は信じたものだ　彼は何らかの自然詩人であり

己が心を激しく苛む大きな悲しみに浸っているのだと、

それで余りに近く踏み込むことを避けたのだった、それで

も私が

その悲し気な忍耐強い眉と　沈黙が考えに耽っている

確固たる唇とを凝視めている間、私は切に望んだのだ　内

部を

覗き込んで　彼の人生の物語をすっかり知りたいものだ、  
その手を持ち上げてそれを開くのは何でもないことのように  
に思われた　使われないせいで汚れた蜘蛛の巣で閉ざされた

扉をよくそうしたように、でも彼は立ち去ってしまった、だから彼に悲しみがあったとしても、それは彼と共に過ぎ去ったし、彼の語られることなき愛の宝物だつて全て、彼を雲と共に連れてきた愛が

彼を川の流れと共に引つ張つてゆき、夜山の端へと促し、繁茂した森と大滝との間に巻き込んだのだ。

そうして

夏が過ぎ去った、しかし秋の冷気が秋のコオロギにその悲痛な讃歌を歌いやめるよう命じないうちに足場や岩の憩いの場を確保することで、私は、もう一度避けていた彼を求めるともなく求めてある静かな美しい日に、しかも午後の日光の中を、上の方へ見晴らしの効く岩棚へと登つてゆく

葉を落とす松の木下で物思いに耽りながら立つていた、そこは光り輝く、川が揺すつており、私の足元の葉叢の中に、村が沈んできらめいていた、

そして一本の広大な松が、湾の方に傾いていたが、その木を丘に張りつけている一本の巨大な根の上に彼が座っているのを、私は見たのだった、晚い時刻の

赤い光が物憂そうに西方へ落ちるまで、それでも尚、彼は座つて見ていたのだ、それから後の時間ほんやりと、燃えるような木の葉の束を手にして

通りすがりにウルシノキ<sup>(6)</sup>から折り取つてきたものだった、気が付くと彼の足元には、山の花々が集められていた乾燥したシオン、キンロバイ<sup>(7)</sup>、萎れかけているシダが、夜が、丘の我らの間に暗くなつてきて

私にはもはや彼の顔は見えなくなつていた、

それでもそれまで、私は、悲しみを抱き、

孤独のうちに心には希望も失くして歩いてきていたのでそ

の時以来しばしば

その時のことを思い出しては思い巡らしたのだ

あの年老いた人は今も、地上で疲れ切っているのだろうか、私が夢見た彼の高度の才能は、真物だつたのだろうか。

しかし私は、本当に聞きたいものだ、と長らく待ち続けた、こここの川々が突然歌い出すのを、青みがかった暗がり、こここの山々が滔滔たる詩となつて整列するのを、あるいは我らの赤い森が、この風景の連続を明るく照らすのを見た

いものだ。

それでも私が学んだ大切なことがある、忍耐を尊重する

こと、心の喜びの花々を折り取ってその心の真実を証明する 神秘に富む 意志 の存在すること、

我々の感じたばかりの愛のために 悲嘆を取り戻すこと、人間の苦痛に更に機敏に同情すること、

そしてこのことで私自身が成長したのだと知ったこと、以前には想いもしなかったことだが 神 と 自然 をもつと一層謙虚に高度に信じ、愛に更に身を委ねるように

なつたこと。

尚も松の根はしがみつきながらごつごつした岩へと重なり上つてゆくが、枯れた先端は乾いており、その枝々の下に彼は座つて西の方を凝視していた。私は歩いてゆきながらそこへ近づくにつれて ひどく変化したような感じがし、心も足もすっかり年老いたのだ、まるでその 漂泊者<sup>さまろうびと</sup>が自らの生命<sup>いのち</sup>を残して替りに私のを持ち去つたみたいに、夜が丘にいる我らの間で暗くなつたのに乗じて、

二重の相互交換なのだ、あたかも 全く

彼と共に消え失せたのは私の古い自我で

彼が私となつて今も疲れ切つて大地を歩いているみたいに。しかしこれらは幻想なので 実のところ大方は

私がこの点で これまで考えたり述べたりしたことは

おそらくせいぜいでも 述べるに値いしないことだつた、最初にその 見知らぬ人 がこの岩々の間に現われて以来 のことは。

並みの人だつたのだ 多分、ありふれた気掛りのせいであらう。罪のない悲しみを抱いていたが、自然の美しさを感じるときと夢みるように慈しんだ拳句の並みの生命<sup>いのち</sup>の持ち主だつたのだ つまりは、

とはいえ、不思議なまでに環境にびつたり嵌り込んでいたのだ。

ああ！それで 初めて私が彼を懐かしく思つた時 小川は掠れ声で囁き泣き、暗ずんだ木は小枝の端々まで嘆き悲しんだのか。

彼は見つからなかつたのだ、私が道を間違えて

高台のそばまで野生の花々を辿つて行こうとも

草地に浸るうとも、詩人の岩 を攀じ登ろうとも

ウェルズの森 で松の木々の下を滑ろうとも。

自然 が私に悼み嘆けと言つたのだらうか、それとも私を駆り立て続けたのは 私自身の臆ろな心の中で

打ち鳴る不安な音だつたのか、私には分らないが 彼は

永遠にこの丘陵地帯から立ち去ってしまった。

もはや彼は探しようがない、波打つ枯れ草の中で  
草刈り人<sup>ひと</sup>や取り入れ人<sup>ひと</sup>が額をぬぐい

日光の輝きの中を見回しても、もはや決して  
村の荒々しい雑種犬や 忍耐強く挽かれて  
畑の畝を耕す牛たちさえ

あの足取りを見つめようとは思われない。

年月は過ぎ去った

だから私にとって 彼の追憶は消えてしまふにちがいない、  
それでもしばしば私には 野原に一人の 姿 が見えるし  
彼その人の生身と現実味は殆ど変らないが

あの足音が近づいてくると それはいつも消え失せてしま

うのだ、

私にはしばしば その姿が野原に見えるし、

風の中で悲し気に泣いている声低き詩篇が聴こえるので

私は彼を悼み、彼の悲嘆を悲しんできたのだ。

それなのに一度も 私は彼の名前を聞かなかったし

一言たりと知らなかったのだ 彼の来歴について、あるい

は何故彼が

このような荒涼といつていい土地のはずれにやって来たの

かについて、

それで今も知らないのだ、家から家へと

彼が清々しく別れを告げたのか、それとも噂のとおり

二日間で離れ去り 森と荒野を後にして

溜息をつく水の流れと共に 自らを追悼しに行つたのかを。

(CP. 116 21)

1. The Tyrian hills. 古代フェニキアの港湾都市テュロ  
スの丘々。

2. "Shaking Acres", "Neighbor's Hole". 「揺れる土地」

「隣人の裂け目」など一種の親しみを込めた畏敬の念で  
呼ばれていた谷間の場所。

3. pyrola. イチャクソウ属の各種の多年草の総称。 win-

tergreen ともいう。葉が梨の形に似ている。

4. partridge flower. アカネ科ツルアリドオシ属の蔓性

の草。北米産、常緑の丸葉、芳香性の花と赤い実をつける。

5. maiden-hair. ホウライシダ科クジャク属のシダ。花

言葉 "discretion" (思慮)。

6. sumach. ウルシ科ウルシ属の木の総称。ハゼ、ヌル

子など。



7. hardhack = shrubby cinquefoil. 金露梅。バラ科キシムシ口属の落葉低木。

\* ホーソーンが、後出の「マルギテース」や本誌前号で紹介済みの「ピコメガン」共々大変感銘を受けたと賞讃した作品である。読者を内部にぐいぐい引き込む見事な短篇小説になっている（「森田」一二六参照）。

## 女生徒 ある牧歌

\*

The School Girl : An Idyll

一日中吹きまわつて 陽に照らされていたトウモロコシの  
茎を

あわや押しつぶさんばかりだった風が、陽が沈むと  
谷間から波のようにうねり寄せてきて

櫛をもみ、松の間を洗い、

静まって鳴りをひそめた、しかしその歓迎の音を聞くと  
読んだ跡も残さず怠け眺めていた本を置いて

風に音立てているシダの間に昨夜来の頭痛の澱を

取り除けそうだと希つて

子供たちに気付かれないようにと軽やかな足取りで  
私は脇の扉から滑り出て、刺戟臭のカミツレモドキ<sup>(1)</sup>が

並ぶ細道を横切り バツタが

びしびし飛び交う野原を越えて 榛の木の間に

流れてゆく小川に遮られる所へ

出た。そこで勿体ぶっている小枝に

私は麦藁帽を掛けて座り 西風を希い求めた、

胸と手の平を火にかざすように外へ広げて。

そよ風は弱まっており その日の一日も終っていた、

そして黄昏も暗い薔薇色となつて 山際を

登るのをやめていた、とその時、榛の木の茂みを抜けて

綺麗な女生徒が一人、小川を背にして姿をみせた、

小さな谷の<sup>(2)</sup>こぼこぼ鳴る洞に<sup>(3)</sup>発するその小川で立ち止つて

彼女はショウブ<sup>(2)</sup>を引き抜いていた、そして小川が下方で二

重になる

所に来ていて 実は 私は十分に知っていたのだ その

草の茂る

流れの二重になる繋がり具合、角度、寸法を

陰で湿つた薄い琥珀色のホウチャクソウ<sup>(3)</sup>を探していた、

その娘は 母親にどうしようもなく溺愛されてきたのだが  
この数年間に彼女の血縁は全て 一滴一滴  
赤く弾けては落ちて消え失せていた、

そして彼女が最後に残されたのだった、この一つの絆で  
地上に繋がって、彼女のひどく若い生命は  
深淵の上に超然と離れていながら引き留められていて  
宙吊りに揺れていた、丁度注ぎ込んだばかりの水溜りの上

アメリカシャクナゲの花が雨にゆるんで

雌蕊の糸でぶら下りぶら下り、揺れて落下するみたいに。

その娘は榛の木の茂みと花をつけないスプーンウッド<sup>(5)</sup>  
を

抜けてくると見ていると、突然立ち止って話しかけてきた  
私は頭を上げて夢からさめ、その娘を凝視めようと

しているような気がした、草叢<sup>(4)</sup>で歌っている

昆虫の声の途絶えることなき調べが

実をつけた草の中で旋律を刻み顫えていて

私を夢見に誘い込んでいたからだ。私は思いを凝らし

意識して 半ば闇の中に沈み込もうとした、

ところが時折りそよ風が起って

私の瞼から浮き滓を掬い取るように眠りを吹き払った。

私は彼女を凝視めた、その眼は濡れており

どこか彼女の母親の顔色のようなものが その娘の頬に  
華やかに燃えていた、余りにも母親そっくりがそこにいた、  
その娘は立つたまま 私を夢の国から呼び出した。

幻の国だった、だが彼女は逡巡していて

極めて幻影のように思われた、涙を流しながら立っていて  
現実とは思えない言葉を話していた、だが私が

その意味を探していると 彼女は再び更に口調もはつきり

もう一度挨拶を繰り返した、そして体によくはない夜露が

怖くないかと私に訊ねて 花々を差し出してくれた。

それから私たちが 斜面を家の方へとぶらぶら

サトウカエデ<sup>(6)</sup>園を通って丘へ向かってゆく途中

彼女は自らの嘆きの種を語ってくれた 音楽の稽古

音符を演奏することも正しく数えることも出来なかった、

朝食前に、歌を歌っていたのだ、

その朝、だからどうしても泣きながら眠りにつきそうだが、

その日一日そうして過したのだ、それで遂に夜になって

小川のそばを上流へ曲がりくねって歩いていくと  
亡くなった母への想いが心を横切り

それと共に自分自身も若くして死ぬのではないかと  
という怖れが生じたのだ。

私は何か慰めの言葉を口にしたら、  
彼女の卒直な悲しみが同情を禁じ得なかったからだ。

私たちはその丘を登ってゆきながら 呼吸を整えるために  
立ち止っては

土地の或るインディアン<sup>(7)</sup>の物語を語った

ワッサホールと美しいクエイカー教徒の乙女について、

彼女は丸太小屋を後にして酋長の小屋へと赴いたのだった  
それでようやく その娘の顔は再び晴れて穏やかになった

とはいえ、夜中に晴れている空のようにで

続いて雨になりそうな気配だった、私たちは彷徨い続けた

しかし目指す村に着かないうちに その娘は別れを告げた

父親が住んでいた家の近くで、

父と兄と、その娘自らが住んでいたのだ、

それで私は歩き続けた、その娘はそこで見送ってくれた、

家の庭の門口で、半ば微笑みを浮べて

睫毛の先を涙で新たに尖らせて。

兄弟が二人、ここに住んでいた

私は初めて 彼らの名前と来歴を知ったのだ、

相続人として村の通りに踏み留まりながら

老いた父親のために星の瞬くうちから黄昏れ時まで

働く訓練を積んでいたことも、だが父親はもうすっかり年

老いて

金持だと評判で、木にとつての樹皮のようなもので

おそらくもつと頑固なのだが、それだけに十分に締まり屋

なのだ。

そこで彼らはあくせく働いて待ち、精一杯働き節約した、

独り身の妹は蓄えるのに適していた

明けても暮れても、遂に彼らの手は固くなり

若さも彼らから去っていった。それでも約束の日は

どんどん近づいてきた 一寸した資産と安息の日が、

そして年月が過ぎていった、それでもやはり彼らは起きて

は眠った

自分たちのためではなく、もつと強くしがみついている人

のために、

溺れる人のように 力が衰えてゆくにつれて

飽くことなく握り締めるのだ。遂に希望の尽きる時が来たまさに擦り切れた戸の敷居石そのもので

彼ら自身が年老いてしまい、老いた父は亡くなり彼らは遂に貧しいままとなり、大きな家屋一軒となった

蛾のように 彼らの資力で維持されていたのだが。残ったのは債務証書と抵当に入った牧場

その家屋以外は全て 気の毒な世襲財産だった、今日 私はそれを見たのだった、全くペンキが剥げて

新しいこけら板が一式 空に向かっていた  
おそらくグラブマツ<sup>(8)</sup>か、せいぜいでも液材<sup>(9)</sup>で

五年間は大丈夫だが 腐ることは保証ずみのものだった。

以上はともかく、私が話題にした娘は

長男の子で がらんとした家の中で

光のようだった、実のところ実用向きでなく、

父方には似ていなかった、しばしば判ったことだが

その子は父方ではなく母方の血統を引いていて

その点では遥かに恵まれていた、それでその張り出し玄關

には、

そこにはあの老人が生前いつも確かに

石のように座っているのが見られたものだが、

若い足取りが集まり 軽やかな笑いがさんざめき  
優しい女の声々が行き交った。一度 私は実際に見たのだ

った

その暗い一隅に ぎこちない若者が

ぶらぶらばたばたしているのを、蜘蛛の巣に掛かった  
カエデの乾いた実のようだった、だが彼女はやはり親切だ

った

誰にでも温和で、そして私にはその小川のそばで、  
年令<sup>(1)</sup>にはとても思えないほど思慮深そうに思われた。

その夜 私は殆ど眠れ<sup>(10)</sup>ないでいるうちに夢に見た、  
牧場の草をモカシンを履いてやってくる

優しい足取りを、それは全くそっくりだった  
私が話した物語のインディアンに。

その日私と一緒に彷徨<sup>(11)</sup>った彼女は

やはり傍らを歩いていた、が こちらは打って変って

森の急げ者の娘になっていた！

今 彼女その人かと思えば、次にはボイペ・ホタルブクロ<sup>(12)</sup>

かと思うと、どちらでもない だが、私は私で一人歩き

続けた。

そして如何にも私らしく、露を帯びていないコヌカグサと  
（蘆<sup>13</sup>）の中を  
歩きながら再びその女生徒の素朴な悲しみと彼女の優しく  
別れを告げた顔に思いを馳せながらそつと呟いたのだった  
次のような言葉を、

眠れ、娘よ、儚げな頭を垂れて

長々と消えゆく一日の光に

折り伏し陽の差す聖なる曇りに

疲れて眼を閉させば、導かれて

ゆくだろう 暗くなりゆく小さな谷から谷を

小さな豎琴と鐘に 震えながら。

その日見つけた花々は

真夜中の芳しい星また星が輝いている間

あの 忘却を誘う指を指を 揺すっていられそうだが、

そうすれば朝の流れまでずっと

美しく善なるものが悉く 汝のものになっていよう

日の光から おぼつかない時間から 集められて

真夜中の芳しい星また星が輝いている時。

休め、乙女よ、諸々の悲しみを休ませて

未来の様に 汝の胸の

罪なき秘密に 涙ぐむことなく

その記録は書物のように閉ざしておこう

かくして永遠に脇に置こう

その日の失望の数々を、

調べのためにもリズムのためにも泣くなと汝に命じよう、

ただそこに居て、ただそこに居て、汝の夢を

薄れさせ、暗く深く まどろむままにしておこう、

私は聞いた 小川の囁きを、

流れの向うの乾いた畑地が

夜の無数の音楽で

私の夢で 尚も揺れてはリンリン鳴っている間。

（CP. 121 26）

1. Mayweed. キク科ローマカミツレ属の草。欧州、ア

ジア原産。葉は刺戟性の悪臭を放ち、頭状花の中央は黄色、

周辺は白。

2. sweet flag. サトイモ科の多年草。葉は針状、葉と根

に芳香がある。

3. bellworts. 宝鐸草。ユリ科チゴユリ属の植物、北米産。／桔梗（ホタルブクロを含む）。キキョウ科の植物の総称。

4. laurel-blossom. 111は mountain laurel だろう。

5. spoonwood. 右と同じアメリカシヤクナゲを指だろ。常緑の灌木で、交互の葉と、バラ色か白色の花の散形花序。木製のスプーンを作るのに用いられたからの異称とも。

6. sugar-orchard = sugarbush.

7. Wassahoale. タッカーマンの住んだ町のすぐ近くの町ディアフィールドをかつて襲撃した先住民の酋長の一人「ソネット」第二集一九に登場する（「森田」四二、一一一参照）。

8. spruce-pine. マツ科の常緑針葉高木。

9. sapwood. 辺材、白太。樹皮の内側と心材との間の柔らかく白い木質。

10. moccasin = moccasin. シカ皮など柔らかい革でできた、もと北米先住民の靴。

11. Phoebe Bellflower. Phoebe はギリシャ神話に登場するポイペー。Uranus（天空）とGaia（大地）との娘で巨人

族の一人。Artemis またローマ神話ではDianaと同一視された。bellflower はキキョウ科ホタルブクロ属の植物の総称。通例鐘形の花をつける。両語を合体させて両者のイメージを一身に体现させたような少女像を詩人が創造したものだろ。大地と天空との婚姻から生まれ出たホタルブクロの妖精のような少女。

12. bent = bent grass. ヌカボも含む。イネ科コヌカグサ属の植物の総称。

13. reed. 葦。沼地に生える背の高いイネ科の特にヨシ属、ダンチク属の草。

\* 一人の女生徒を語った短篇小説の趣きの詩。夢みるような、文字どおりの、浪漫性に富む、「牧歌」である。女生徒の現在と過去が重層し、作中に嵌め込まれた土地の酋長と白人少女との物語が女生徒のそれと融合する構造が見もので、作者の物語りの才能がよく現われている。

\*

ある末日聖徒<sup>(1)</sup>  
A Latter-Day Saint<sup>(1)</sup>

ごま塩頭の老人に 道で毎日出逢う  
鬚<sup>あごひげ</sup>を垂らし、じつじつと厳<sup>い</sup>つく

大きくて重たげな顔をしていて、商店街、市場、  
路地、通り抜け道は 彼の足取りを聞いてきたのだ  
夜も昼も。その声、ゆっくりとした話し方、

蹄鉄工の一撃のような下方への動作、  
注意を払わぬ耳、見ようとしなない眼、

というより まるで一纏めにして見るように見る眼を

誰か思い出さない人がいるだろうか、我らはあらゆる人の

ことを考えた、

彼を一人一人に準<sup>なぞら</sup>えながら プラトンとかパウロに

あるいは包囲されたエルサレムをぐるりと回って

逃げながら金切り声で呪いを 自らへも彼らへも叫んだ

人に、その人は

遂には警石弓が勢いよく飛び出して命を落としたのだった

ここ、こういう一隅で、涙ぐましいまでの奮闘も及ばず。

彼は立って見ていた 大きな世界が煙になり泡になり続け

るのを、

日時計盤の上に居るみたいに 彼自身が指時針<sup>(2)</sup>になって、

あるいは 時の老爺 のように草刈り鎌の柄に凭れて

怒りの日の収穫を待ちながら 今や刈り取れる

までに稔<sup>なり</sup>ったと。やがて間もなく、言葉の一撃で

彼は下の群衆に判断の雷を落とす、

事の終りを彼は予言し 絵に描き

その他の事柄は神の聖人の方々に残された仕事。

一つの結論へと彼の理由の全ては向かってゆく

それでこれが彼には分かるのだ、聴問者たちを

要点から要点へと引きつけながら、尤も尚も取り留めなく

腐った卵が彼のこめかみの辺りを飛び交いはするが。

再び彼は彷徨い続ける、どこをか と訝<sup>う</sup>って

憐れみながら後を追っても そこで彼を見失ってしまう。

間もなく忘れてしまつて 君はその大きな 本通りの

流れと圧力に合体する、とみるまに 向うの壮麗な 張り

出し玄関<sup>(3)</sup>へ、

見たまえ、群衆が走つてゆく、旗と縁石を黒く汚しながら

アテネ市民が馴染みの 列柱廊<sup>ストア</sup>へ駆けてゆくように

あるいは最頂のスターティウス<sup>(4)</sup>を聴きにゆくローマ人のよ

うに。君は突進し続ける。

すると 嘲<sup>あざわら</sup>っている雑踏の真中で

彼は 泥と黄色い卵黄に汚れて

法則を定めている、ゼノン<sup>(5)</sup>や ザモルクシス<sup>(6)</sup>のように。

(CP. 133 34)

1. モルモン教徒 (Mormon) の正式名称。一八三〇年に宗教家ジョセフ・スミス (Joseph Smith, 1805-44) によって米国に創立されたモルモン教会 (Mormon Church) の教徒。

2. gnomon. 日時計の影を投げる針。指柱。

3. (the) Porch. 大文字だと「アテネの講堂」。ゼノンが弟子に講義した列柱廊 (Stoa)。

4. Statius, Publius Papinius (c.45-c.96). ナポリ生れのローマの叙事詩人。詩のコンクールで何度も優勝してからローマで、ドミティアヌス帝から寵愛された。技巧に富む作風で、『テバイ遠征物語』(Thebaid) 未完の『アキレス物語』(Achilleid) が現存。

5. Zeno. ストア学派の開祖であるキプロスのゼノン (of Citium, c.340-c.265 B.C.) と、弁証法の父で「アキレスと亀の競争」で有名なエレアのゼノン (of Elea, c.490-c.430 B.C.) がいるが、先の注3から判るようにこれは前者。

6. Zamolxis, Zalmoxis とも。ヘーロドトス『歴史』・

九四 九六 (岩波文庫版中巻) では、サルモクシス (Zalmoxis)。<sup>\*</sup> サモスでは奴隷で、ピュタゴラスに仕えた人物。自由の身になってから産を成し長者となって生地ゲタイ (今日のブルガリア北東部) に帰り、靈魂不滅説を周辺に説いた。更に名声を得んとして地下室に三年間隠れ棲んだ後、姿を現わして自分は死から甦つたのだと人々に信じさせた。死後、神霊とされた。彼をヘーロドトスはピュタゴラスより遙か以前の人だと考えている。

\* 後出の「老乞食」と同じように、あるモルモン教徒の姿を描写した作品で、この詩人の冷めた諷刺・諧謔精神がよく現われている。滑稽で愉快な押韻を遊ぶことでこの人物の未熟な器用さに微笑を送っているとして、ゴールドデンは、「ジェルーサレム」と「ヒムセルフ・アンド・ゼム」(Jerusalem himself and them)、「フオウム・オン」と「ノウモン」(foam on gnomon)、「ヨウクス・イズ」と「ザモルクシイズ」(Yolks is Zalmoxis) などの例を挙げている (G・二七)。

最初の四行と最後の八行を除いて二行ずつが押韻しながら



ら続く形式である。

## ロトゥルダ Rhotruda

\*

シャルルメイン<sup>(1)</sup>王の黄金の治政時代、  
三十三年目かそこらのこと

若きエジナルドスは 宮廷の付近で育ち

(裏門の戸口に 生れたままの姿で棄てられていた)  
それから徐々に登りつめていった、

まず騎士見習い、その後 家来、最後には王付き騎士  
にして大臣になった、が こういう出世も何ら謂れはなか

ったが

唯、その 王女 の足元へ導かれるに到ったのは別だった、

何しろ彼女は王家の三人娘の長女で最も美しく

この上なく優雅でもあり 愛らしかったのだから。

というのも ベルタは婚約しており、三女の

ジゼリアは 男に目を向けようとはしなかったのだから。

そこで 心の全てをこの目標に傾けて

彼は注目しながら 新たな春の訪れ前に、あの大きな眼の

中の鈍い関心に火を付け 気乗りのしない両手が

自分の手の中で打ち震えるのを感じられるものと

待ち望んだのだ、それで十分に彼は自らの役を果たして

如何なる機会も見逃さずに、賄賂を使ったり、自分と

その光との間に立ち塞がりそうなのは全て

振り払って 敵の心を真底捉えて か細いながらも友人に

なった。

しかし彼は何に留意したのだろう、貴婦人方の愛について  
若きランスロットが愛するグウィネヴィア<sup>(2)</sup>を手に入れた

次第について

捨て子についても、あるいは不確かな血筋についても既に  
読んでいたのだから。

そしてある朝 浴場からの帰途、彼は宮廷の階段で

その 王女 と擦れ違いざま

その場で彼女に口付けして優しく狼狽させたが

彼女の眼の中に夢想していたような死には 出くわさなか

った、

彼には自らが古いロマンスの英雄なのだと分かった、

かつての己れをよしとせずとも、それを乗り越えたのだと。

そして彼らは愛し合うことになった、もしもあの騒然たる

苦痛が

愛ならばだが 深い喜びの不安と

この上なく鋭い悲しみと。尤も彼には分つていた 彼女の

心が

まさに彼自身の心なのだと 卽座に得られたものだと

そして一飛びに松の木々から掌に落下する

滝のように直ちに粉々になつて

霧の花輪となり 壊れてきらめく飛沫しづみの弓になるのだとも

だからといって彼女への愛が それだけ減るわけでも彼女

への微笑みに倦むこともなかった、

それでも日のあるうちは超然と構え素知らぬ様子で

彼は歩いて 騎士らしく上機嫌で戯れ

唯、彼女の心に少しでも斥けられそうな

ことだけは何にしろ避けようと切に希つた、

それでもこの思いは強烈だったので たとえ世の終りに到

ろうともと

彼は命懸けの愛を誓つてロトゥルダと婚約した。

しかし 愛の神 は、恋人たちをこのように導きながら

ある寒い風の夜、彼らに悪ふざけを仕掛けた、

エジナルドスがいづつもの習慣どおり

方形の内庭を横切り、幽かな月の光もなく

星の瞬く兆しもない暗闇の下を

王女 の戸口を訪つと 大いに歓迎されていると分つて

その騎士は、愛へのいつもの慎みを忘れてしまった、

彼女の足元に跪くと その諸手を手に包んで

騎士精神と豪胆に富む物語を語り

戦いの始まりを告げた。その間、滑らかな白い腕を

彼の指はすべり上つて飽くことなく摩さすり続け

夜が更けていった、それでも彼は話し続けた

これまで見てきた英雄行為の数々を 土地をすつかり

土埃に変えたとまでみえた 美しいパーヴィア(3)の

城壁下での猛攻撃を、そこでルー(4)が

ロンバルド族(5)を打ち負かし、シャルルメインが突撃して

馬と騎兵を切り離れたのだ 熱烈に話したために

風の中で喉が渴いて彼は彼女の唇を自らのに引き寄せた、

沈黙が恋人たちを 長くしつかり閉ざした、

大きな鐘が音を 一つ 彼らの夢の中に叩き込むまで。

城の鐘！ エジナルドは退散しそこなつたのだ！

慌てふためいて彼女は 彼を扉へと導いた、

とその時何と！ 宮廷の中庭は降雪で真白で

折りしも星の光で辺りの夜は澄み切つていた、

何十という足音が、めつたにないことだが 彼の戸口へ向

かつた、

何十という足音？ 切り抜けられない深淵！

どうすればいい？ 自分たちの秘密を露にするわけにはい

かない、

最初の明りで嘲りの目に晒すわけには、

彼女は自分の戸口に 彼の足跡を残しておくわけにはいか

ない！

発見され破滅する時が迫つていた、

そう思いながら二人は 口付けに口付けを重ねた、

と、突然 その貴婦人は身を屈め、自分の方へ

恋人を半ば気が進まぬげに引き寄せて

自らの両肩に巧みに寄りかからせた

彼の方は息をつめて 重みを軽くしようとしたが

それで軽々と彼を中庭の間中抱えて

彼の戸口へと運んでいった、それから脅え戦<sup>あは</sup>いた野兎のよ

うに

自らの足跡を後ろ向きに辿つて 己が私室 閨房へと逃げ

帰つた、

しばらくは喘いだものの、全く事もなく終つて安堵したの

だった。

しかるにシャルルメイン王は夜中に起きては

陳情書を吟味したり、領国

クーニゴストイラとかファノレーエンの

布告に目を通したり署名したりしていたのだった

穀物で十分の一税を徴収するため、それに裁可したり

自らの刀の柄頭<sup>かぶ</sup>でそれに押印したり

それで 下の中庭での臣下たちの声々を耳にし

窓から見降ろしてあの二人を目撃したのだった。

怒りはしたが王も 半ば笑いながら眺めていた

その離れ業の物珍しさと突飛な行爲を、

笑つてしまった 全く！ 呼び寄せた二十人と共に

奥の寢室四十号室から、

彼らは一晩中ずっと 君主の寝台の傍らで凝視していた

手に手に抜き身の剣と松明を持つて

この恋人の絆を 鉄と火で試さんものと。

しかしこの君主は、思つてもいたのだ

明日になればそ

かの役者二人に敬意を表することになろうと

それでも

再び穀物課税の問題に戻つたのだつた。

つと窓を閉ざして

それでも夜が明けると 王は会議を召集した、

配下の貴族全て、廷臣と親族も

そして郷土と貴婦人を大 接見広間 に

集め、そこに鎮座した王は 額に高々と

突き出る王冠を戴き 瀑布の如く彼の周りに

なだれ落ちる垂れ布の下に威儀を正した！

色彩の斑紋が交錯し 網目をなした、

そしてこの上方には 流れのそばの木々のように

豊饒な彫刻作品が、花輪や薔薇、棕櫚やパルミラヤシ、

果実や繁つた群ら葉にびつしり飾られて、吊り下つていた。

そして更に、昂揚した 大広間 は珍しい目新しさを帯び

というのも王の右側にはローエナ妃が 雲のような

大理石然として会釈しており、彼女の傍らには

物言わぬ雌獅子が踞つていたし、その対面には

これと釣り合いを取るように サツフォーの再来が立つて

いたのだから

若いエレクシアなのだが 彼女の頭上に冠はなく

携える豎琴の突端には花輪が乗つていた、

そして壁には 長蛇の列をなして下つていた、

マリーン<sup>(8)</sup>その人が、そしてウーゼル・ペンドラゴン<sup>(9)</sup>が

それぞれのその日に到るまでの力強い所業の全てを示しな

その日になると全世界は破壊と混乱のうちに喪失したよう

激突した軍馬と兵士たちの怒りもどこへやら

粉碎された戦<sup>い</sup>でどうしようもなく遮二無二闘いながら

アーサー王は頭に十箇処傷を負つたのだつた。

しかしこういうものを貴族たちが凝視めているようにはみ

えなかった。

王は厳しい様子だったが 廷臣が一同に会し

ていた、

大理石然として会釈しており、彼女の傍らには

物言わぬ雌獅子が踞つていたし、その対面には

例の貴婦人とその恋人が真中にまかり出ると

やおら口を開き 臣下のその二人に こう糺した、

王の僕であるお前にどのような手柄となるのか

己れの立場を、信頼、誓いを忘れて

己れだけの邪惡な目的のために 己れの咎を隠し

領国の王女の一人を まるでラバのように

利用するとは。荷役の獣にだぞ！ 冬の夜の

風と雪の中を彼女の肩で

運ばれるとは。「死だ！」と怒った貴族たちが言った、

騎士と郷土と寵臣は呟いた「死だ！」と、

同意しない声は一つとして拳がらなかった、しかし

シャルルメインは仇なす二人に剣を順ぐりに向けながら

それでも穏やかな 思いやりに富む 嘆願に弱い王として

己が子供たちにも祝福されているのだから、肉に食い込む

爪のように生れつき己が肉体を悩ますばかりの者にもそう

なので

震え戦くその一対にも親切な目差しを向けて言った、

「さよう、エジナルドス、今回の所業では 汝は

十分 死に値いするが、彼女をそれ程愛しているなら

この点で彼女の父の 我が子を保護し

監理する者の 意志を求めて彼女への求愛の許しを

彼から、彼女の及び汝の他の有力者から得るべきだった、

汝の命はここに没収する、貰い受けたぞ！ よいか汝！

没収は二つの命共々だ、

それに汝のけなげな門番の女のもだ

彼女と結婚せよ、

神に榮譽を、

互いに愛し合い、主に従え」。

ここまでは伝説。だが ロトゥルダの微笑みと

貴族たちの拍手喝采については、實際彼らは自分たちの

最初の判断にも喝采を送っただろうが、

我々は何も知るところがない。それでも尚、この物語は生

き続け

あの古い暗黒時代を照らす光のように輝いている、

婦人の機知と愛の素晴らしい閃きと

彼女の所業共々 記録に留められるに値いする、

何しろ彼女は 愛しい恋人に自らの髪を投げ出したのだ

内庭中に怒りの刃が飛び交っていた時に！

あるいは戦の矛と猛り立つ剣に縁取られた

絵のように、それは我らの眼前に掛っている

何しろあの宮廷の中庭は降雪で白く

善良な王は夜中身を乗り出しており

ロトゥルドはエジナルドを背に負っていたのだから。

(CP. 136 40)

1. Charlemagne = Charlemagne. シャルルマーニエ、  
カール大帝(七四二―八一四)のこと。フランク王国の王  
(七六八―八一四)。神聖ローマ帝国皇帝としてカール一世  
(八〇〇―八一四)。

2. Guinivere. アーサー王伝説に登場する King Arthur  
の妃。円卓の騎士中随一の勇士 Launcelot と愛し合う。

3. Pavia. イタリア北部ミラノ南方の町。十二世紀再建  
の聖ミカエル教会。一三六一年創立の大学がある。

4. Loup. 字義は「狼」。勇士の一人の名。

5. Longobard = Lombard. ロングバルド人(イタリア  
北部に五六八年に定着した古代ゲルマン民族)。

6. palmirah = palmyra. オオギヤシ。熱帯アジア産の扇  
状葉をつけるヤシの一種。

7. Sappho. サッポー(前六一二頃 ?)。エーゲ海の  
レスボス島生れのギリシア最大の女流詩人。

8. Merlin. アーサー王を助けた有徳の魔法使い、予言

者。この行からの六行は、壁に掛かっているアーサー王伝  
説の物語絵巻織物の説明で、物語中物語になっている。

6. Uterpendragon. イングランドの王。ティンダル公夫  
人イグレーヌを恋し(公死後王妃)彼女との間にアーサー  
(フリテンの王となる)を儲ける。

\* カール大帝の最愛の娘と宮廷の側近の平民出身の青年  
との恋愛を描いた一六五行の長詩。この作品も収録した最  
初の、そして実質上は最後の『詩集』(Poems, 1860)を私  
家版で出版したタッカーマンは、当時の錚々たる文人三十  
人に贈ったが、その中の一人であるエマソンの推輓で、  
「ロトゥルダ」は The Atlantic Monthly, July, 1861. に改め  
て載ったのだった。タッカーマンの「物語る能力」、語り  
の才能を顕著に示す誠に面白い作品である。

\*

「ラリーー Coralie

青白い水辺の花々が

小川が急に曲がる辺りで震えている、

すると汝、ほの暗い奥まった隅が

黄昏の中で更に暗くなつて 再び私に呼び戻してくれる  
初めて彼女が私をここまで連れてきた時  
私たちのものだった生命と栄光の幻影を。

もはや祝福は遠のいた、

それでも黙つてここに立つてしていると

私たちには空想したりその振りをするとは

出来ないだろうか、小さな花々が汝の安らいでいる辺りに  
銀色の霽となり優しく落下する雨となつて降つてきて  
汝の世界は平和なのだ、愛しいコラーリーよ。

私たちの友情は飛び去る

そして、あらゆるものを彼女の強力な影で暗くしながら

やつて来るのだ 悲惨が、

私たちが古い眼で見る顔々を

もはや見ることもなく、苦惱 そのものが消えてゆくこと

だろう、

これさえ私たちには残されないように、コラーリーよ！

諸々の感情と恐怖が

かつては私たちのものだったが 地中で滅んでしまい

悲嘆は冷たくなっている、

心は悲嘆に鈍感なのかも知れない、それならもし私たちの

涙が

尽き始めたり忘れられるものなら 現われるだろう

汝の寝台の囲りに弔問客が、失われたコラーリーよ。

小川の花々が光り輝き

幽かな歌を 流れ下る水は口ずさむ、

だが汝のためにではない、

どんよりした夜が涙を流し 悲しみ嘆く松は

死んだ髪を汝の年若き墓所の草に落とす、

我がコラーリー、私のコラーリーよ！

私はそのガラス瓶から花を一輪抜き取つて

彼女の墓に捧げた 何となく責め立てられ涙を流して

だが その花の心は抜け落ちた 薔薇を攫んだ時のように、

私の心は砕けたので やがて萎れてしまつたろう。

私は凝視めている 移りゆく影また影を、

風を突いて丘に注ぐ日差しの破片を、

長い青い森を、すると言葉では語れない悲しみが  
私の眼の中に閃めくのだ 激しい雨の滴となつて。

私は聞いている 彼女の乳母車を、

その小さな車輪が私の心臓の上を通過するのを

おお 何時<sup>いつ</sup>になつたら暗くなつた家の明りが戻ってくるの  
だろう

おお 何時になつたら丘陵をあれ程美しくした彼女が来て  
くれるのだろう、

私は座っている 応接室の窓辺に

黄昏が暗くなり 風が戸外で冷たくなる時に、

だが 祝福されたあの足が歩くことはもはやないので  
我が幼な娘<sup>こ</sup>と私は 一緒にそつと忍び泣くのだ。

(CP. 141 42)

\* 「「ラーリー」は詩人の亡妻の形象化であろう。まだ

幼い娘と共に、妻を哀悼している作品。The Atlantic  
Monthly, April, 1863. に初出の詩。初めの六行詩五連の押  
韻形式は全て異なっていて、第一連から順にA B B C A C、  
A B C A C B、A B A A B A、A B B A C C、A B C A B  
C。後半の四行詩は押韻なし。

\*

## シドニー Sidney

そなたはあの静かな午後を忘れてしまったのか？

どれ程美しかったことか野原は、小川はどれ程豊かだった  
ことか。

丘陵はどれ程幸せだったことが 覆いかぶさる緑の中で。  
野原は緑だった、そしてここ点々たる窪みには

豊かな雨が溜つて 緑はますます緑だった。

私たちは南向きの窓のそばに座つて  
何を話すでもなく あるいは唯 黙々と座っていた、

とうとう夏の暗くなつた部屋にうんざりして

一時の感情で私が話すと そなたは微笑むのだった  
それでこれに満足して私たちは一緒に彷徨い出て



野原を横切り、その時々を満喫したのだった。

私はこれから あのと取りを辿り直すことにしようか？私

たちが再び

あの交差している 川 に行きつくまで、そうだ、

というの も 再び私はあの小径小径を そなたと共に歩み

そつだから。

ここには庭専用の寝台が、灌木の繁みが、

宙を舞う蜜蜂の不機嫌な呟きが、

そしてここには 川 へと続く生け垣がある。

私の傍らをそなたは静かに 牧場の花々を縫って動いてい

た、

そばを、だが近寄りがたく、明け方の

紫の縁に瞬く星のように冷たく、そして上辺は

自らの足元の世界に気付いていないようにみえたが

それでも私が草の中から一攫み引き抜き

ここかしこで花を示してはその名前を告げ

不案内な語については何故そうなのか口になっている時

そなたは立ち止つては生け垣の中の漿果(ベリー)を摘んだのだ、

それで私は 言葉でそなたの心に届く望みは失い

そなたは冷たい人だと信じ 私自身ではそなたの顔を

呼び戻せそうにないと思つて、夢の中でのように

そなたの居るそこをここをと うろうろし続けた、

そしてたとえ可能でも あるいはそう思えても

そなたの愛の特性に到りつけようなどとは思わなかった

自分はいずれ目が覚めるに違いないと十分によく分つてい

るので

ぼんやりと辺りを見詰めていた それで底無しの溜息をつ

きながら

私の人生へと 私の知つていた人生へと逆戻りするのだ

何しろそれまで私は そなたの麗しい髪が柔らかに

こめかみから流れ、口を開けた様子が半ば開きかけて

雨を待ち受けているどの花よりも紛(まじ)りかたなく

美しいのに気付かなかつたのだ

おお若さと愛らしさよ！汝らはそれ程貴重ではないのか？

実現可能な高さに置かれる程には、あるいは

冷淡や気紛れが明白とはいかないまでも

その影や斑点ぐらゐは感じられる所に、

あるいはそのためにその明るさがもつと明るくなる所に置

かれる程には、

丁度時折り古い絵の中に見られるように。騎士の額はその傷のせいで

気高くなるのではないか、あるいはそれ程美しくない人が唇にロージン<sup>じ</sup>が付いて貴婦人になるように。

そのように欠点のせいで そなたは一層優雅になれるのだ

ろう

それで私は 智慧の点ではこの上なく愚かなので判るのだ  
葡萄は手に入らないものだけが酸っぱいのだと。

しかし、シドニーよ、見てごらん！ 川 が下を流れてい

るね

暗く水路を流れるディアフィールド<sup>(2)</sup>だ、ここ私たちの

足元を、浅瀬になつていない、天然の障害にして支柱だ、

それでもそなたが向きを変える前に一緒に遠くを見ようよ

丘からやつてくる旅人たちのように、まだ別れ別れになら

ないで

しかし隔てられていても眺めようよ

山々や夏の空を

緑の真中に家畜の群れる牧場を

細波<sup>さなみ</sup>を、川岸のライグラス<sup>(3)</sup>を

私たちが二度と再び見られそうにないものとして。

だからこうしていても善しとしてもらおう、こういう偶然の光景、

それに伴つた風景を見る眼は この時ここで最も愛らしい

人であるそなたに 気付かれない筈はないのだ、

この独立した別箇の美は、この地上と空に見られる

あらゆる種類の優雅さと 同類なのだ、

人間の温かさが与え得る如何なるものも欠けていないのだ

から。

だからお願いだから、私の言葉から辛辣さを取り去つてお

くれ、

さあ、もう先へ進もう、そしてもしそなたがとにかく

愛する最も孤独な心への敬意を

尊重するなら やはりあらゆるものの中に

涙の塩味があると判つて それをここに享受するわけだ

私の与え得る あるいはそなたの維持できる如何なるもの

共々。

霞んだ眼で後ろ向きではあつても 私に過去から

黄金の眼差しを取り戻させて欲しいものだ

何しろ覚えているのだから この流れの谷間を、

あらゆるものに光を与えた甘美な存在を、

そして私の不当な行ないと 実のところそなたの軽蔑とを、  
何しろ私たちが歩いている時 そなたは指で摘んではばら

ばらにして

半ば剥いだクローヴァーの茎を 私に拒んだのだから。

それでも別れる前に 私の口からこの希いは受け取つて欲

しい

私の口からだけではなく 私の心の真中からも

そなたの若い生命<sup>いのち</sup>が風で衰弱したりしないように、

風に打たれないように、激しい雨に苔打たれないように、

そして変化や悲しみを乗り越えて進んでゆくように、

あらゆる穏やかで情け深い光の上を導かれていくようにと、

そしてそなたの夕べが訪れる時には その光の周りに

悲痛な黄昏が垂れ込めたりせず、遅く長く

留まってくれますように そなたに相応しい美しさが星の

ように

羊毛様の桃色の中にあつて 専ら心を動かす星のように。

でも そなたの詩人に今は与えておくれ 一本の全き花<sup>まじつた</sup>を

何故ならここで私たちは 再び逢うからだ 庭の境界に、

そなたその人のように芳しく艶やかでもあるのを

とはいえ ダマスカス<sup>(4)</sup>が産み出す赤黒い蕾ではなく、

ヨーク・アンド・ランカスター<sup>(5)</sup>でも 白でも黄色でもない  
バラ色をした薔薇を。 (CP. 156 59)

1. lozenge. 宝石の菱形。ダイヤモンドの菱形小面。女  
性用の紋章に使う菱形の盾。ここ、紋章に口付けして(誓  
つて)の意か。

2. Deafeld. 詩人の住んだ南隣の町。一七〇四年に先  
住民に襲われた事件がある。(「森田」一一参照)。

3. rye grass. イネ科ドクムギ属の数種の植物の総称。  
欧州原産、米国で牛馬の飼料用に栽培される。

4. Damascus. シリア南西部の都市で首都。現存する世  
界最古の都市の一つといわれる。この地ゆかりの薔薇は

「ダマスク・ローズ」(damask rose [Rosa damascena])。

濃厚な芳香(ダマスク香)の淡紅色、一季咲き。花言葉  
“brilliant complexion” (輝かしい顔色)。

5. York and Lancaster. 薔薇の一品種。紅白斑らの花を  
つける一季咲き。バラ戦争(一四五五 八五)でヨーク、  
ランカスター両家がそれぞれ白と赤のバラを紋章にしたこ  
とに因む花名。

\* 「シドニー」も前作「コラーリー」や「エリドール」同様、作者の妻ハンナの化身であろう。手を替え品を替えといった趣きで、亡妻を追悼する詩人で、美しい抒情掌篇小説とも見える作品である。

## 慰安 Refrigerium

\*

彼らは寝かせておこう 彼らの全盛期は終わったのだ、  
夜と静寂だけにしておこう

ゆるやかに雨を降らせて持つて来させよう

ワラビ<sup>(1)</sup>、コキンバイザサ<sup>(2)</sup>、クワガタソウ<sup>(3)</sup>、イトシャジン<sup>(4)</sup>を、

春の充足の全てを、

どうして私が気にかけてよう 友人を恋人を、  
敵と敵とが愛し合っていたって？

緑の土の塚があつても何だろう

私にとつて何だろう 不親切な遺骨があつても、

死が宥めて 忍耐強く

和解へもつていったのだから、

唯、彼らの墓そのものには、土が

一緒くたに混ぜ合わさつていて  
蜘蛛が墓石を繋いでいるが。

その丘陵へと私は彷徨つ、泣きながら

かつての日、私たちが立つた処、

立ち尽して日没が死んでゆくのを見ていた処、  
涙を流しながら 移ろいゆく紫を凝視していた処へ

おお吾が愛しい人！ 惨めさが

私のものになつてしまった、なのにそなたは

優しく冷たく眠つたまま。

(CP. 159)

1. brake. 大きなシダ類、ワラビなど。

2. stargrass. 花弁や葉が星形に配列している草の総称。  
ヒガンバナ科コキンバイザサ（小金梅笹）属の植物。

3. Speedwell. ゴマノハグサ科クワガタソウ属の草、低  
木、小木の総称。対生葉で小形の花。トラノオを含む。

4. harebell. キキョウ科ホタルブクロ属の植物、青い吊  
り鐘形の花をつける。

\* 標題は、「冷却」「鎮靜」の意味もあるラテン語。作中の「私たち」は、詩人自身とやはり亡妻のハンナである。この作者の心から、若くして亡くなった妻が片時でも消えることはない。三連とも、A B C D C A B の型で押韻する。植物が豊富に現われることと微細な具体描写が、この作者の一つの特色である。

\*

### 老々食 The Old Beggar

キンポウゲ<sup>(1)</sup>が突然 草地のそれぞれに現れ  
夏の長咲きクロウヴァー<sup>(2)</sup>は遠く近くに、

空中にこつこつ突き出た岩や雨裂のそばには  
ラズベリーローズ色<sup>(2)</sup>と青い吊り鐘草<sup>(3)</sup>が宿る時、

彼は何をするのだろう？ 彼は何と言えるのか？

溢れんばかりのアメリカシャクナゲが彼の負債を払う？

とんでもない、しかし陽は路上に射して暖かだ、

だから もし今日駄目でも明日は大丈夫かも！

それでも一年も終りになって 草が枯れ、

穀物が全て穫り入れられ、庭のそばに、

川一面に、森の一带に

秋の煙が青く漲る時、

彼は何をするのだろう？ 彼は何と言えるのか？

紫けぶる湿地に、丘陵の連なりに。

何にも、しかし快活に格言を囁くことは、

もし今日駄目でも明日は大丈夫かも！

しかし今、雲の吹き流れが白く更に高くを疾駆し

樺の木の薪<sup>まき</sup>が火中の油脂のようににはちばち爆ぜ

風がひゅっひゅっ猛烈に鳴って 窓辺で

晴雨計の気泡が雪に埋まる時、

彼は何をするのだろう？ 彼は何と言えるのか？

外へ！だ、生かす殺すは我らの手中なのか？

たとえ彼には気儘に見本を示すがままにさせるにせよ、

それでも もし今日駄目なら明日は大丈夫かも！

彼の泣き声は無視しよう 自分は食に十分ありついて

この上なく暖かな羽毛で巣を覆ってきても、

彼の衣類の臭いは避けて顔を顰め

扉を前でびしやりと閉めて彼をわめかせよう！

彼は何をするだろう？ 彼は何と言えるのか？

我らにとつて何だというのか 我らが教え諭し祈つても、  
もつと良い日が来るように 彼を放つておこう！

そういうわけで もし今日駄目でも明日は大丈夫かも！

ああ！昼の光が弱つて見えなくなる時、

バツタの歌が重荷になりそうな時、

コオロギの鳴き声が姦しくて聞くに堪えず

エゾゼミ<sup>(4)</sup>の唸り声が耳ざわりになる時、

我らはどうしようか？ 我らは何と言えようか？

心臓が古び、頭が白くなって

悲嘆 が、閉じ籠る子供のように家に帰つてくる時、

もし今日駄目でも明日は大丈夫かも とはならない。

我らが涙と共に植え、悲しみのうちに摘み、

不運が 悪運が 到来し

陸地は冷たく、こわばつた手が出血し、

収穫用にも我らが種を殆ど持ち帰れない時、

我らは何が出来るのか？ 我らは何と言えればよい、

我儘な過去を我らが見渡すことになるだけなら？

敢えて我らは望むのか 現在からもつと幸福な光線を、  
あるいは、もし今日駄目でも明日は大丈夫かも と。

ああ、とんでもない！でも今 彼に支える手を伸べよう、

彼の消えゆく力の周りで 腕となり絆となろう、

悲惨な人々への非道を扱つのを信頼に足る仕事としよう、  
そして困つたことが戻つて来たら 君は訊ねるのか

我らは何が出来るのか？ 我らは何と言えればよいかと、

神に感謝しよう 我らが盛んな日に善行を行なつたことを、

(その乏食の重荷を我らの持ち堪える<sup>こた</sup>かんぬきにしよう)

雲が湧き立つようにと心を籠めに籠めて祈ろう、

そして、もし今日駄目でも明日は大丈夫かも！と。

(CR. 160 61)

1. buttercup. キンポウゲ属の植物の総称。

2. raspberry rose. 平均すると穏やかな紫がかった赤に  
なる変化に富む色彩。いわゆるバラ色よりは青みが強い、  
「マジエンタ」(深紅色)よりは少し青白く、赤っぽい、  
「フクシャ」(明るい紫紅色)よりは青、白っぽい色。

3. bluebell. 青い吊り鐘形の花をつける植物の総称。キヨウ科ホタルフクロ属、イトシャジン(harebell)など。ユリ科ツルボ属、あるいはハナシノブ属の植物も指す。

4. harvest fly = dog-day cicada. エンゼミ属の大形の蝉の総称。既に本稿の二番目の作品「森の空き地」の第七連に出ている。

\* ある年老いた物乞いを目撃しての作者の思索。二つの反復句を微妙に変化させて使う技巧の面白さが見もの。七連とも全て最初の四行はA A B Bの型で押韻し、残りの四行(最終連は九行詩なので、後半の五行)は、同音 [ei]で押韻する。使用語彙は、may, say(各十回)、day, pray, stay(各一回)、array, gay, gray, lay, pay, ray, slay, survey, way 各一回ずつ。

## フランチェスカ ヘ パオロ

Paulo To Francesca

物憂い 夏 が木々の葉を落としてしまい

秋の野がすっかり褐色になったり荒涼となった頃、  
私たちはどれ程、頬を寄せ合って散索し

人通りの途絶えたこの道あの道を踏んでいったことが、あ

の悲しいタベタバを、

そなたは 私のそばにぴったり寄り添って何と恐しそう

だったことが！

殆ど敢えて話しかけようとも大きく呼吸しようとしな

った、

一陣の風が吹くたびに声が拳がるように思われ

自然 そのものが嘆き悲しむように思われた、私たちは

どれ程

西の方低くに 両眼のように際立っていた

双子座を 雲の崖鼻の下に見たことが！

あるいはぼんやり霞む松の大枝越しに 今 涙がどつと

溢れ出すのだ

蠍座 の心臓の赤い鼓動を凝視めたことが、

その間も愛と恐れで羽搏きながら 時間が飛びすさって

ったのだ。

おお 盗み取った危険と歓喜の幾時間よ！

おお 無駄に燃やされた過る情熱のランプよ！

おお 真実なる偽りの心よ！今尚 私には味わっている思

いのだ

そなたの与えてくれた数々の口付けの苦さを。

そなたは裏切つたのだ そうなのだ、しかも私以上に、

そなたは誘惑したのだ。ああ！あの秋の夜のこと、

日没間もない時ときつぱり暗くなる間とを

示す揺れ動く一線のように思われた時刻に

私たちは一緒にいたのだった、脅かすように敵かに

夜は更けていった、幽かな光もたゆたう余地はなかったが

西には燃えるような銅<sup>あかがね</sup>色の雲が、一条！

覚えていますが、私の気持としては何から何まで

私自らのことも そなたのことにも殆ど絶望してしまつて

それでいて最悪の事態がどうなるにしろ半ばどうでもよく

なつて

それでその嵐は私にだけ唾を吐きかけたのかも知れなかつ

たので

私は笑いながら思つたものだった 私たちはどの位道を踏

みはずしてしまつたのかと。

それから急に嫌悪の情に駆られて泣き出したのだった

私たちの生涯の惨めさを思つて、何しろ残酷な手が

二人の間に深淵を掘つたのだから、私たちには越えられそ

うにない、かといつて

敢えて中に飛び込むわけにもいかなない罪の深淵を。

それでも、私たちの堕ちゆく運命をそぞる思い巡らして

私は話したのだ、はつきり弁えている者のごとく

中には見出し出した人もいる深い平和と、

邪悪とは違ふ善なるものを、節度あるパウロの<sup>(し)</sup>ように

論証を、判断を、そして来たるべき生活を、

ここまで来て、遂には嘆き悲しむことになる人々のことを

嘆き悲しむよりは

泣いて断食するほうが増しだと思ひ定めて。

それで私たちは泣いたのだった その時までそれまでした

こともなかつたのに、

そして半ば決心したのだった 私たちはもう逢わないよう

にしよう

繁みの窪みの中でも、露<sup>あつち</sup>な空の下でも

もつと暗く 影 がびつたり閉ざしている間も、

そなたは、息を呑み、向きを変えて このこと覚えてい

ますか？



両腕でびったり抱き締めて ぼんやり薄れる優しい眼で  
私の口に口付けしたのだった、まさにあの口付けを

アポローンが若々しいカッサンドラー<sup>(2)</sup>に与えて

彼女の予言力ある唇を封印した時のような、ああ、蛇の舌

2。 (CP.162 63)

1. Paul 聖パウロ(?) c67。異邦人へのキリスト教伝  
道に努めた使徒。新訳聖書中の十四通(または十通)の手  
紙の筆者。

2. Cassandra トロイの王プリアモスとヘカベーとの娘。  
トロイの女予言者。トロイ滅亡という真実の予言をしたが、  
アポローンに呪われて誰にも信じられないようにされた。

\* フランチェスカ・ダ・リミニ (Francesca da Rimini, ?  
1285?) は北イタリアはラヴェンナの城主グイド・ミ  
ノーレ・ポレンタの娘で、隣国の城主で狂暴な醜男ジャン  
チオット・マラテストと一二七五年頃政略結婚させられた。  
ジャンチオットは結婚の不成立を恐れて眉目秀麗な弟のパ  
オロを身替りに立てたために、結婚後事実を知ったフラン  
チェスカのパオロに対する恋情は一層募った。二人共、そ

れぞれ正規の配偶者との間に子供も生れていたが、一二八  
五年頃のある日密会中に、ジャンチオットに見つかり、二  
人共殺された。ダンテの『神曲』地獄篇第五歌に描かれて  
いる。寿岳文章訳『神曲』「地獄篇(集英社文庫)六  
〇 七一参照。

この詩は、死の世界でパオロがフランチェスカに語り掛  
けた体裁を取ったもの。もう逢わないようにしようと決心  
したのに、結局は「そなた」の誘惑のせいで自分も殺され  
た、と何だか恨みがましい男の言い分である。これではフ  
ランチェスカは浮かばれそうにない。タッカーマンの「解  
釈」が作品化されており、これも興味深い掌篇小説の趣き  
である。二十三音で四九行が全て微妙に複雑に押韻する詩。

### マルギテース Margites

\*

私はしない 畑を耕すことも種撒くことも

鋤を持つことも荷車を操ることも

積み草を抬げること、土盛りしたり鍬入れすることも、

不毛な土地を肥沃に保つために。

それで浮き沈みがあつても限界が見えても、最盛時でも変

化しても

私は山の背にも平野にも一体感を見い出す

それで仕事の一続きと悲嘆の幅広さが  
軽い圧迫となる、心ない雨のように。

愉悦と危険、不足と浪費が

同じ圧迫感で扉を叩き、

それから彼方へ飛び去つてゆく、私が味うものは何にしる  
辛辣を嫌つたりしない。

それで浮き沈みがあつても限界が見えても、最盛時でも変

化しても

私は花飾りを戴く冠を授かりはしないし

気にもかけない 不思議な抱擁も

法の認める愛の蜜月も。

四季が地上を過ぎてゆく

市松模様の澄んだ雲と共に

熱さ寒さに狂うことなく

全ては毎年の習慣どおりに。

しかし、窓から身を乗り出すと、大抵

私は秋の芳醇な微に幾つも気づく

霜になる空気、黄色い葉、

蔓植物に凭せ掛けた梯子に。

カエデが大枝に思いを馳せて

北方へ赤らんだ枝を突き出し

霧が家の周りに幽かに流れて

岬の高台は一面の曇り。

それでも同じこと、丁度

栗の木の森を私が見渡し

不毛の風景を目にしてから

リラの芽の赤い群がりを眺めた時と、

それで万の事は同じにみえる、一つ事なのだ、

眠りながら横たわる、あるいはせつせと働くことは

丁度 以前は日の出と共に起床して  
以来 日々の歩みを止めない人々が

目的のない無骨者として、それよりは賢い愚か者として  
異なる行ないをしながら終りまで働くのと

淀んだ水溜りの中で腐っている雑草、とは  
水が雑草の中で淀んで腐ることなのだ、

そして全ては浪費とか戦争の降伏によって  
破壊に到るか崩壊となる、

ネ口<sup>(1)</sup>が自ら黄金の城壁を計画したり  
忽必烈汗<sup>(2)</sup>が己が邸宅を建てて以来、

しかし私は些かも 変化や口論は気にかけず

凝視め続ける 朝方疾駆する雲を、  
その日の静かな傾きぶりを、

そして月が中天にかかる時

私は歩いてゆくのだ どこへとも何故とも弁えぬまま  
あるいは怠惰にも松の木下に横たわり

乾いて褐色になった松葉を噛んでみたり 横になったまま  
考えるのだ 巧く忘れ去られたのが吾が人生なのだ。  
(CP. 166 68)

1. Nero. 残虐な行爲と悪行で有名なローマ皇帝(三七  
「五四 就位」 六八)。

2. Cham Cublai = Kublai Khan. クビライ・カン、フビ  
ライ・ハン(一二一五 九四)。蒙古帝国第五代の大汗  
「皇帝」で中国元朝の始祖。成吉思汗(Genghis Khan)の  
孫。

\* マルギテースは、ホメーロスに詩によって、浅薄な知  
識を嘲けられ見せかけぶりを暴露された人物だとされる。  
また、雄弁家のデーモステネースがアレキサンドロス大王  
を積年の敵だと証明しようとした時には、彼をマルギテー  
スの徒だと述べた(Lempriere's Classical Dictionary of  
Proper Names mentioned in Ancient Authors Writ Large, 3  
rd ed. London : Routledge & Kegan Paul, 1984, p.355.)。そ  
ういふ人物の独白形式に托して、作者が自己省察を展開し  
てみせた詩。巧く忘れ去られた人生が吾が人生なのだと、

如何にも孤独な隠遁者の面目躍如と言つべき一句だ。しかしこの詩人を、我々は「巧く忘れ」てはならないであろう。十三連とも全て、A B A B と押韻する詩。以下の五篇は、モマディ編『全詩集』が初めて公刊した、それまでは未刊のままだった詩である。

### 頌歌 グリーンフィールド兵士記念碑に

\*

Ode : For the Greenfield Soldiers Monument

この光沢のある石の細い尖塔は  
上で釣り合いを保っている 国の象徴で、  
そうだと ケマンソウ<sup>(1)</sup>にだけは 語っているのか  
悲しみと愛の記章として？

あるいはここ、この緑の村で  
秋の日の薄明りの中で  
私たちは集って悼むのか、かつてのことを  
物語を 過ぎ去った勝利を 忍んで。

そうだ、もっと多くをだ、私たちの進物は気前がいい、  
惜しみなく生き血を捧げた彼らのもの同様、  
死者たちにだけでなく 私たちに

私たち自身に、と、これからそうなる私たちのもの同様

私たちは捧げるのだ 遠い先の年月のために

無意味な儀式ではなく、掻き立てられた自らの深い心を  
しかも優しく 祈りと涙と共に

幽かな光の一条を！ 驚 鳥を！ (CP. 171)

1. bleeding heart. ケシ科コマクサ属の植物の総称。特にケマンソウ。この原語の文字どおりの意味は「血を流している心」、あるいは「(人に) 血を流させる心」。

\* 一八七〇年十月六日に、グリーンフィールドの町の広場に建った兵士記念碑に献呈する詩を、町の人々はタッカーマンに依頼した。それに心えて儀式で朗読された詩。彼は隠遁生活は送っていたが、町の人々からすっかり忘れられたわけではなかった(G・四八)。四連共A B A B と押韻する。

## ハリエンジュの花の下で

\*

Under the Locust Blossoms

葡萄のように垂れ下り匂う

ハリエンジュ<sup>(1)</sup>の花の下で

アメリカサイカチ<sup>(2)</sup>の花の下で

花々の息吹が閃かに私の心を逃れたり

打ったりする、幾年もが過ぎ去っていたのに、私が

その花の群落<sup>いくも</sup>が音もなく揺れているのを見てから、

銀色の総状花序が あの日没の空を背にしていた、

空は一面薔薇の色。

私は夜を待っていた

コオロギが白いクローヴァーの寢床の中で

物憂そうにリンリン啼き出すまで

あるいは私の足音に一つまた一つと鎮まってゆくまで。

私は待っていただろうか、そこに一人で、影の下を

私のものならぬあの庭を 私は彷徨っていただろうか。

それは匂いの漂う陰にすぎなかった、

息吹の回想だったのだ、

それで私は立っていた、暗闇の侵入者として、

揺れる花々の下に

独りで、それも不安な物憂さに目を凝らして

何かの動きを探して、閃かな光を求めて。それは訪れたか

って？

おお あの瞬間だった！ おお あの息吹だった！ ハリ

エンジュの花咲く時の。(CP. 171 72)

1. locust. ニセアカシアとも。米国産マメ科の木、枝に棘がある。

2. honey-locust. マメ科サイカチ属の棘のある落葉高木。小さな複葉と甘い果肉の莢をつける。北米原産。

\* 自然の中に、それも暗くなつてから「侵入」することによって、自らの心の奥に「閃かな光」を求めようとした詩人の、小さな一枚の自画像といったところだろうか。三連共前半の四行はA B A Bの型で、後半は、順にC D C、C D D、C D Cの型で押韻する七行詩。

海辺 The Shore

\*

再び森から海辺へ

この世を全て後にするこの世の端へ

生死の限界のような、

そこへ風が麻酔剤の芳香を吹き寄せ 魂が

彼女の悲しみを思い出して

遂にはどんより満足を覚えながら 夢み夢みる。

風が海辺から吹き入れてくる

塩辛い殻をつけた海草の爽やかな塩の匂いを

すると私の心は 潮のよう<sup>うしお</sup>に前後に流れる、

ここにはとても愛らしい唇<sup>くち</sup>があつたし、ここには

私の手の中にぎゅっと

苦痛のように幸せを押し込む手があつたのだから、愛を求

め愛を求めて。

私には海辺の土砂の盛り上りが見え

その上に大洋の帯が暗く静かに見える

すると私の眼には 涙が流れてきて

海辺の白い砂丘が、海辺と

高まる青い海が

呼び戻すのだ 私の悲しみを、だが私の喜びは喜びは決し

て。

ここだった、私たちが海辺に佇<sup>たたず</sup>んでいたのは

もう遅い時刻だったので水面の明りが動き始めていた、

燈台はぎらぎら輝いていた、

私たちは言つたものだ その日を掛け替えのないものにし

よう 禍が来ても

福が来ても、利益が来ても、嘆きが来ても と、

おお貴重であれ、永遠<sup>とわ</sup>にいつまでも 私たちに私たちにと

って。

独り その海辺に 夜

私は立っている と 嵐めく中に燈台が閃光を送つたり断

つたりして

失われた楽しみを探し求める、

しかし 盛り上がる波の背は遙か遠く、下降する

## 大波の衝撃と

激しく後ろへ打ち寄せる波とが、そればかりそればかり。

(CP. 180 81)

\* 五連とも第一行の末語は「海辺」(shore)である。第一連の「魂」とは「私」のそれである。この詩もまた作者の、妻への哀悼歌でなくて何だろう。タッカーマンは妻の没後、ほぼ丁度十六年後の一八七三年五月九日、二六年在住したグリーンフィールドで静かに他界した。享年五十二歳三ヶ月であつた。

\*

## 自然と必然性

Nature and Necessity

「今晚私たちどこで眠ろうか？」森は葉が厚く繁りに繁り  
目的地までは遠かつた。

君は踝を挫き、私は肩に重荷を負っている、

この銃は何時間もの間ほとんど重くなつてきていたが

肩当ても肩章もなく

下がっているのだ ガザの門<sup>(1)</sup>におりるかんぬきのように！

どこで眠るつて？ここではどう？大枝がはらはらと髪を揺  
っているのだし。

私たちはたつぷり眠れるだろう

琥珀の息づく寢床で、赤く吹き寄せられた松葉の上で

塚の上、ここかしこ積り溜つたものの上で ヘラジカの毛  
の敷物に寝るように。

私たちは冷んやりと眠れるだろうし

目覚めて物思いに耽ることだろう 壮大に朝が輝くまで。

何ものもここでは汝に危害を加えられない、何ものも汝に  
は近寄らない

欠乏や驚異を煽り立てても

唯、フクロウや弱視のヨタカは翔<sup>と</sup>びさすらつてくるが。

悲しいかなウイ<sup>(2)</sup>コアリスよ！あの酋長は汝を

遠くで聞いたろうか、汝 精霊の鳥を

そして踵<sup>ひるがえ</sup>を翻したろうか 汝の出没した丘から。

「でも駄目！」と君は言う、「ここは立ち止る所でない！

私たちが後にしてきたあの家

あそこでは話しかけられることも自由に言葉を交わすこと

も出来なかつたが、

それでも泊れるかも知れない。夜は暗く更けてゆくし

径はどれも見つけ難い

四方八方が遅い時刻に迷い込んだ森なんだから！」

では行くがいい！それでも君は私たちと始めたように

歩き続けるほうがいい、さもなければ

夜はここで過そう。あの娘も連れていったらいい、試しに、あの小さなボロ着の娘を 私たちに付きまとうて

物乞いをし ひいひい言う娘を、

ヤマウズラが巢から走り出て君の道案内をするように、

君の足元に突き進んできたかと思うと倒れてしまふ

雛が孵っているからだ。

思うに その有様を見れば動かずにはいまい 石の心も  
アダマント<sup>(3)</sup>やカルケドン<sup>(4)</sup>の心も、

何と憐れをそそのことか 母鳥が

片眼で啼きながら他方の眼で凝視めている姿は。

君は見ていた 桜の木のそばの彼の掘立て小屋を

そして聞いていた 彼の酔って歌う歌を、

私たちが帰ってくると何かしら子供っぽく贅えはしたが、彼はどのような話し方聞き方が出来るのか 信仰や真実に

関して、

舌にミットをはめ、

どちらの耳にもブンブン啼きする蝉がいるのに。

しかしここなら私たちには 熱弁も激論もない避難所だ、

去り難くなる惧れはあるが、

昼日なかでさえ君には太陽が見えないだろうから。

今や明りが殆どなくなつて君の羅針儀が読めない、

間もなくここは 真夜中になるだろう、

戸外はまだ日の光が去つてはいないけれど。

それで何を？ 私たちは呼吸して味わう、森林の風が

軽やかに運ぶ野生の香りほど甘美なものはない。

小さな放浪の獣の臭跡さえ

田園一帯を汚染するにしろ 増しだと思われる、

雨がちになる前の人家の周りに



立ち昇る 下水溝や通気装置の悪臭よりは。

それでも私は感じたのだ 君は早速訝がるか

笑うだろうが こういう言葉を聞くと

何と不思議な魅力が どことなくぼつんと建つ二軒家には

あることかと

入り口辺りの草には 何と涙が見えることか！

何と胸の痛くなるような哀愁が

揉み立てる風に打たれてぶら下っている衣服には あるこ

とか！

そんなのだ、ゆっくり歩こうよ、君の蹠を庇って、

私は努めて話すつもりだ、

君の望みどおりの接待主である彼について聞き及んでいる

ことを。

ためらったり回想するのを辛く思わせないで欲しい

君は別に自らそうしたいわけではなかった

そのせいで君はこれまで多くを得てきたのであり、失うこ

とは少なかったのだ。

初めて彼がこの地区にやってきた時 家を

建て 開拓する人手を雇い

あまり技能のない娘だった妻を連れてきて

狭い土地を 冬の燃料には十分だったが 切り拓き

家族を養うためにあの小屋を建てたのだ

そして幽霊に悩まされてやめたのだった 開墾を建築を。

いや、実際は開墾はした、建築も、粗い囲い柵には

火を差し入れる隙間があつたし

命懸けの覚悟もしていた、無償とは思っていないかつたの

だ

そして何も申し出はなかったが、やはり歩き回っていた

亡霊が、悪魔が、行進も

実際は恐怖に駆られたその人が 唯、乱心したのだった。

「何に？」さあ、孤独、あるいは考えすぎたのだろうか、

消耗の精霊が

夜ごと彼の戸口を叩いた、そのような状態が続いて

彼が自宅のその柵を燃やして飲酒に耽るに到るまで

彼には触れたり感じ取ったりは殆ど出来なかったが

幽霊の手は 間を通り過ぎていたのだった。

ピーピー囀る小鳥、ありふれたネコマネシドリ<sup>(5)</sup>がニヤーニ

ヤー啼くのを

彼は密かに畏敬しながら聞いた、

「インディアンを恐れ」てもいて 目を見開き続け、  
ウェスタパイプ<sup>(6)</sup>の火を消し、噛み煙草に固執した、

恐れたからだ 煙草の火の跡が残って

風の吹くたびに堆高い藪の火事が匂ったりするのを。

しかしインディアンはやって来ず インディアン・サマー 小春日和が続いた、

幽かな影、薄明りの月、

そして遙かに青い水蒸気が 夢見る松にかかった。

それで彼は昼間は内に籠って酒を飲み

太陽を 月を 信仰し

何故 星は輝くのを忘れたのか 訝った！

そして今 君は確かに足の不自由さは前より良くなった

防備を撤去された己が皆で

彼は酒を飲み、くだを巻き、サタンとその仲間を撥ねつけ

るのだ。

その妻は？ 彼女は話が出来ず 单调さの余り

つまり何も見るものがなくて亡くなった、

子供たちはいえ 自分が全く知らなかったことを残念

に思わないのだ。

全く哀れなことだ！私の物語がもっと楽しいものであって

欲しいのだが。

それでもそれは物語などではなくて、唯、

真中で、始まりがなく、それでいて終りもない。

しかし冷気が吹き、あの森までが更に怪しくなる時には

彼らはどのように生きられるのか、いや生きねばなら

ないのか、

私にはとても考えられない、だが温かな君なら信頼できそ

うだ

あの我儘に自活する蝙蝠のようにぶら下ってとか、

木々に囲まれ隠れている熊のように

とか、臭気の強いふわふわした脇腹肉のベーコンのように

とか、厨の煙突の辺りに巢を張った蜘蛛のように

とか、牛の耳に掛かった蜘蛛の巢系のようにとか、などなど。空想は別に新しくなくてよいのだ

だから温かでありたい！ 冷淡で貪欲であつても

君は自分も持ちたいなどとはまず思ふまい

あの、白い卵が五箇入っているキツツキの穴のような臭気の強い薄暗いねぐらを、私たちはむしる打ちのめして

もらいたい

不幸を目覚めさせよう！

運命の嵐を抜けて真直ぐに私たちの目的地に到達しよう！

(CP. 181 85)

1. Gaza. サムソンがベリシテ人に眼を刳りぬかれた所  
「土師記」一六・一一二。

2. Weekoalis. 「私」の友人である先住民の名。次行の「精霊の鳥」がその別名。作中では「君」「汝」。

3. adamant. 何物にも侵されないとされた伝説の石。昔は時にダイヤモンドと同一視された硬い石。

4. chalcedon = chalcedony. 玉髓。微晶質・半透明の石

英の一種か。

5. cabird. マネシグミ科の数種の鳥の総称。鳴き声が猫に似ている。「ソネット」第 集二六にも出てくる。

(「森田」二四、一〇九参照)

6. vestal pipe. 「ウエスタ」はローマで、国家の象徴であつた神聖な火の女神。それにあやかうとしてその名をつけたパイプか。

\* 「私」が先住民の友人と「目的地」へ向かつて森林を分け入り旅する話で、入殖者の或る人物「彼」の悲劇の物語が巧妙に織り込まれている。第五連で突然出てくる小さな娘は、その男の子供なのか？

どういつ生き方をするか、と空想する第十九連の心象など鮮烈である。不幸から目を逸らすことなく、それを凝視しながら運命の嵐を突き抜けて真直ぐ「目的地」へ向かうと自らを鼓舞する作品。標題はこの作者が得意とする頭韻(この場合はN音の)になっているが、実際、本稿での十八篇にもその総計一、三七三行の詩行中にどの位、頭韻が現われることか！ やはり同じように彼が愛用する(ヘンリヤデス「二詞一意」(hendiadys)なのかも知れない。Nature and

Necessity = Natural necessity で「自然の必然性」についての省察を具体性に富む心象と一つの物語で展開したものだと思われる。この詩作品で描かれているようなことが「自然の必然性」なのだ。二十連全て、A B C A B Cの型で押韻する六行詩連である。韻律の技巧共々物語としても実に興味深い。

### ジー・ディー・ダブリュー G.D.W.

\*

小さな集りの友だちだった 私たちは。

いつも一緒だった 断崖でも流れのそばでも

私たちは楽しく彷徨った 彼は

私たちの信仰と夢の指導者だった。

私たちは花を折り取り 雑草をちぎった、

木の実を摘み 川の水をがぶがぶ飲んだ、

そして世の中が実際は荒々しくても

互いの眼を覗き込んで笑い合った。

彼だった 騒々しい世を軽蔑して

勇者を、適任者を、少数者を讃えるのは、

彼だった 怒濤のように話すのは、

その教えが真実だと見出すのは 私だった、

彼だった 見抜くのは 自然の宝庫を、

隠された深みを、この上なく輝かしい空を、

そして恐らく私だった 言葉で告げるのは

彼の更に広く見渡す眼の視野を、

そして今、私たちは 一人一人ぐずぐずと立ち去りかねて

いる

甚だ空しい思いで 秋の大枝のそばで

かと思えば取りとめもなく独り座って泣き悲しむのだ

家の暗がり暗がり、

それでも生え替る木の葉の下で

私たちはぐずついている 彼の栄誉ある忘我の周りを

そして私は 尚も悲嘆を歌い続けるのだ

如何なる韻律にも響きにも出来ないままに。

私たちが如何なる価値にも増して尊んで

彼のために取っておくのにこれ以上相応しい土地がある

うか？

ここは 彼の心を育んだ丘また丘

ここは 彼の愛した谷また谷。

実によく彼は知っていた 水づく窪地のそれぞれを

緑の多い洞穴を一つ一つ、草深い土地また土地を

実に温和で美しかった 彼の表情は

我らはこの友だちを 川の神 と呼んだ。

ここ、彼が早くから歩き続けた所に

我らが友、我らが英雄、我らだけの者よ、

その麗しい勝利に輝く頭を埋めたまえ！

そしてコロンビアに命じたまえ、篠突く嵐となつて叩き

つけよと

彼女の怒れる涙を！復讐の洪水を！

そして彼女自身も嘆き悲しみ絶叫する資格があると言ふ

げさせたまえ！

ニユーイングランドのこの上なく良質高貴な血が

あの運命の一週間に散らされたのだ！

しかしここには見当らない 戦の傷跡は

死や雨に濡れそぼつた悲しみの滴にも

降り注ぐもの悲しい雨にも

湿つた紅葉の輝きにも。

鎮まり返るは ホルン、招集ラツパの合図、

悲惨なトランペットの激しい憎悪、

銃、打ち鳴らされる太鼓、その他諸々の

埋葬儀式の大騒動。

彼の川はいつものとおり流れうねっている、

その川床からの重荷を負つた呟き声も

あの黄金の心を嘆き悲しんでいるとはみえない、

あの優雅な頭を追悼しているとはみえない。

それでも 自然 は留意する 彼の教えた信仰が

我らのものになるようにと、あの昔の日々同様に、  
そして考えるのだ 彼の思想の支流を  
彼の墓の周りに涙のうちに集めようと。

あらゆる優雅な表象が 彼の安息を護っている、  
生れながらの才能、教養で身につけた諸力、  
彼の胸に乗った天然の櫨の葉、  
銀に輝く異郷の花々の十字架が。

長く伸びた草が泣き、高い木が浴びせかける、  
自らの生命の糸を 薄暗く湿った朝な朝な  
そして彼の上には 真夜中の時刻に

大琴座 が 葬儀の灯火ラングのよつに！

それ程多く、だが更にもっと、私たちの眼はぼんやりと泳  
ぐ

それ程には悲しみもなく 私たちは生きてゆく、  
私たちは叫びを挙げる「彼を与えてしまった以上  
私たちに何が残されているのか 与えるものとして」。

私たちは生命いのちを一つ与え、光が一つ取り除かれた、  
私たちの心が知っていた私たちの偶像が、  
子供たちが愛した遊び仲間が、  
兄弟 息子 友人が一身となった人が。

私たちは差し出すのだ 愛国者を、兵士を、かし  
ら を！

この谷々を踏み歩いてきた中でも最も偉大な人を  
おお 父 よ！ この上なく気高い悲嘆と共に

私たちは 御身 に 我らが 川の神 を差し出すので  
す！ (C.P. 185 87)

1. Columbia. アメリカ合衆国。米国の女性擬人名として用いる。次の連の「彼女」は、それゆえ合衆国のこと。

\* タッカーマンが居住したグリーンフィールドのジョージ・D・ウェルズ (George D. Wells) 大佐への追悼・頌徳詩 (eulogy)。帰ってきた亡骸を前に墓地で朗読されたものだろう。彼は作者が 川の神 と呼んで尊敬していた親友で、森をよく一緒に散歩した。「ソネット」第 集九

では「族長ジョージ」として登場する（森田、一〇三―一七七参照）。この大佐は一八六四年一〇月の「あの運命の一週間」に、サウス・シーダー・クリーク（South Cedar Creek）での南軍との激闘で戦死した。一九連全てA B A Bの型で押韻する。

\*

本稿の十八篇の詩作品で改めて痛感させられるのは、タッカーマンの語りの才能であり、それを簡潔であるだけに尚更豊饒濃密となる語句を種々の端正な詩型に乗せて繰り広げる技巧の妙である。押韻の有様や韻律の姿を邦訳で伝えるのは筆者にはまず絶望で残念であるが、この詩人の「物語り能力」の高さは既にソネット群でも光っていたのだが、今回の諸作のような叙事性に富むものでは拙訳でも十分看取されるのではないだろうか。

### 【補遺】「川に寄せる」"To the River"

\*「ソネット」第 集一五に、ゲルトルドとグリエルマなる甲乙つけ難い美人の双子の姉妹が登場しており、前者は黒髪で肉体美、後者は金髪で精神美を象徴していた。この前者と後者に「川に寄せる」のフレンダとミンナは各々

相当しよ。この二人はスコット（Sir Walter Scott, 1771-1832）の海洋小説『海賊』The Pirate（1822）に出てくる双生児姉妹で名前ばかりか人物造形もそっくりなのがその源泉である。この小説とタッカーマンの「ソネット」第 集一四の海のイメージの類似にも言及しながら、ワインツが指摘した（Christian Weintz, Frederick Goddard Tuckerman: The Wisdom of Perfected Grief. Diss. U of Minnesota, 1970. 116-20）。

\* 第七連の最後の二行「愛するのだ、これまで以上に勝つとも劣らず人々を、／今までよりも一層 自然を」。"Love men not lesser than before, / And Nature more than better."は、バイロン（Lord George Gordon Byron, 1788-1824）の旅行記風物語詩『チャイルド・ハロルドの巡礼』Child Harold's Pilgrimage（1812-18）に出てくる一行「私は 人間を愛さないわけにはなべ、自然をむしろ愛するのだ」"I love not Man the less, but Nature more."の言い替えのちびにみえる。ジョン・グッシュの見解もある（John Raymond Getz, The Originality of Frederick Goddard Tuckerman. Diss. U. of Pennsylvania, 1977. 78-79）。